

福音 ア・ラ・カルト

23のショートメッセージ

竹尾 Takeo Jun 潤



伝道出版社

はじめに

福音かきいんということばは、辞書を引くと、「よい知らせ、喜ばしいおとずれ」というような意味が記されています。そして、もう一つの意味として、「キリストによって罪人が救われるという教え」というような意味も、必ず載っているはずで

世の中には、よい知らせがたくさんあります。病気が治る、お金が儲もかる、試験に合格する、などなど。これらのことも、人によっては、確かに福音と言えるかもしれませぬ。けれども、最もすばらしい福音は、実は、後者のほうなのです。

その福音は、どのようなキリスト集会(教会)でも、そのための集まりが持たれ、そのつど、語られていると思います。ですから、後者の福音がなぜいちばんすばらしいかということは、集会に行き、そこでお話を聞けば、よく説明がなされると思います。

けれども、なかなか集会に行く時間がないという方や、あるいは、今までまったく聖書の話の聞いたことがないという方、また、聖書を読んでもよくわからないという方もいらっしゃるかと思ひます。それらの方に対して、このすばらしい福音を、できるだけわか

りやすくお伝えしたいという趣旨のもとに、この本は出版されることとなりました。

集会で福音が語られる場合、どんな場合でも、だれが語っても、「主イエスを信じなさい」(使徒の働き一六章三一節)という結論にたどり着きますが、その切り口はさまざまです。また、必ず語らなければならない重要なポイントもいくつかあります。この本はそれらの事柄を、二十三の章に分けて、なるべくその章自体で、話が完結するようにしました。ですから、最初から最後まで順番に読んでいただけたらいちばんよいのですが、気軽に、興味のあるところから読んでもいいようにも構成されています。

この本の題名の「ア・ラ・カルト」とは、「献立表によって選ぶ一品料理」のことです。ですから、一章一章を好みに応じて、読んでいただくという意味が含まれています。

「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」とあるように、聖書のみことばは、人間にとって、肉体の糧かてよりもっと大切な、本当の意味での食物なのです。

この本が、読まれた方にとって、少しでも福音を理解する助けとなることを切に願っています。

はじめに

最後に、伝道出版社のJ・B・カリー兄、出版にあたり、いろいろご尽力くださった北嶋幹士兄をはじめ、編集や校正に携わってくださった姉妹方に、この場をお借りして、お礼を申し上げます。

二〇〇六年 十一月

竹尾 潤

目次

はじめに	3
1 天地創造について	8
2 神について	13
3 聖書について	18
4 人間について	25
5 死の起源について	30
6 罪について	35
7 この世の終わりにについて	42
8 死後のさばきについて	47
9 悪魔について	54
10 神の愛について	59
11 神の御子イエス・キリストについて	65

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
信仰生活について	従うことについて	悔い改めについて	信仰について	永遠のいのちについて	キリストの昇天について	キリストの復活について	キリストの十字架について (2)	キリストの十字架について (1)	キリストの生涯について	キリストの降誕について	三位一体について
.....
142	134	127	122	117	112	103	95	90	83	78	72

1 天地創造について

初めに、神が天と地を創造した。(創世記一章一節)

何事にも初めがあります。生命には誕生した瞬間がありますし、建物にも建築された時があります。製品ならば、製造された時があるはずで、私たちは、そのことを当然のこととして理解しています。

そうであるなら、私たちの住んでいる地球や、広大な宇宙にも、「必ず初めがあったはずだ」とは思われませんか。永遠の昔から存在していたのではないということ、だれもがうすうす感じていると思います。けれども、宇宙の始まりがいつで、どのようにできたかについては、いまだに明確なことがわからないのです。いろいろな研究者がいろいろな説を唱えますが、残念ながら、決定的なものがない状況です。人間のちっぽけな頭

でこの先いくら考えても、それを説明することはむずかしいでしょう。

はつきり言えることは、これらのものが偶然に存在することはあり得ない、ということです。家にしても製品にしても、それらのものが存在しているということは、それを作った人がいるということです。それらのものが偶然にできあがることはあり得ません。それが複雑なものであれば、なおさらです。では、この地球や宇宙はどうでしょうか。実に秩序正しくできています。地球は一定の速度で自転し、公転しています。太陽との距離も、生物が生きていくのにちょうどよい距離を保っています。こんなに精巧なものが、偶然にできあがったと考えられるでしょうか。

地球の誕生は、今から約四十六億年前と言われています。では、四十六億年あれば、地球や宇宙は偶然にできあがるのでしょうか。そもそも、この四十六億という数字にも、明確な根拠はありません。あくまでも仮定に基づいた計算上の数字にすぎませんが、私たちは、この数字に、何となく納得させられてしまっているのです。

人間が理解できる時間の感覚は、せいぜい百年から千年ぐらいです。その範囲の中なら、

冷静な判断をすることができません。ですから、「この地球は、千年かかって、偶然にできあがった」と言われれば、おそらくだれも信じないでしょう。それはあり得ないと、常識的に判断できるからです。

しかし、四十六億年となると、何となく、「そんなこともあるのかな」と思ってしまうのです。その数字は理解の範囲を超えているからです。何百円とか、何千円とかいうお金しかもらったことのない小学生が、いきなり何十億円もらえと言われても、びんと来ないのと同じです。いわば数字のマジックです。けれども、千年であろうと何十億年であろうと、あり得ないことは、あり得ないのです。

ナチスの独裁者ヒトラーは、自著「わが闘争」の中で、大衆は小さなうそより、大きなうそにだまされやすい、というようなことを書きました。このことは、進化論にもぴったりに当てはまると言えます。

では、偶然にできたのでないなら、この地球と宇宙はどうやってできたのでしょうか。その明確な答えが、本章の冒頭のことばです。神がこの宇宙と地球を造られた——これが、人類がずっと考え続けてきたことに対しての、単純な答えなのです。

1 天地創造について

頭のいい学者がたくさんいながら、なぜ、この単純な結論がほとんど受け入れられていないのでしょうか。それは、彼らが「神はいない」という前提の下に物ごとを考えているからです。神がおられるという選択肢を初めから除外し、そのうえで、結論を模索しているからです。彼らにとって、神の存在を認めることは、時代に逆行しているように思われ、何となく恥ずかしいことのように感じるのでしょうか。そのような風潮は、十九世紀後半ごろ、進化論の誕生とともに起こりました。しかし、冷静に判断すれば、そのような考えこそ非論理的であり、非科学的だということがわかります。

そもそも、この宇宙と地球が偶然にできあがるということは、確率的に皆無と言えるのです。多くの学者がその確率を無視して、さまざまな理論を構築しているのですから、非常にこっけいと言えます。偶然というものに、神と同等の力があるとみなしているのですから、もはや一種の信仰と言ってもよいでしょう。

確かに、日本にも外国にも、神がこの世界を作ったという神話があります。そのような話は明らかに人間の創作ですから、それらの話を事実として受け入れることはナンセンスです。けれども、聖書に書かれていることは、それらの神話とはまったく違います。聖書

と、しんぴようせいという書物の信憑性と、イエス・キリストという信頼すべき方をおして、はつきりとそのことが説明できるのです。聖書という本も、イエス・キリストという方も、調べれば調べるほど、単なる宗教の書物、また宗教家でないことがわかってくるからです。

2 神について

(神は)近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることでできない方です。

(テモテへの手紙第一・六章一六節)

次のように言われる方がいます。

「もし神がいるなら、見せてほしい。」

これはもつともな言い分です。「百聞は一見にしかず」というとおり、目で実際に確認することほど、確かなことはありません。多くの無神論者が「神はいない」と考えているのも、神が目に見えないことが大きな要因なのです。

目に見えるということは、人間にとって大きな意味を持っています。ですから、宗教も、目に見えるもの、すなわち、ご神体とか、カリスマ性のある教祖とかいったものが必要に

なるのです。

確かに、もし神がすべての人の前に現れたとしたら、神を信じない人はいなくなるでしょう。けれども神はそうなさいません。それには理由があるのです。私たち人間が神を見たら、必ず死ななければならぬからです。

神はこのように言われました。

「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きている

」とできないからである」(出エジプト記三三章二〇節)。

これは、神がモーセという人に対して語られたことばです。モーセと聞くと、「十戒」という、古いハリウッドの映画を思い起こす方もおられるかもしれませんが、彼は、歴史的にも非常に有名で、今から約三千五百年前に、エジプトで奴隷となっていたイスラエル民族を救い出した偉大な人物です。

聖書によると、このモーセは、人間の中で唯一、神の後ろ姿を見ることを許された人でした。そして、神の栄光のほんのわずかな部分を垣間見たモーセの顔は、それからしばらくの間、光を放つようになったのです。彼の顔の肌が、神の栄光の輝きを受けて、それを

反射するようになったからです（出エジプト記三四章参照）。神の後ろ姿をほんの少し見ただけで、人の顔にそんな変化が起こってしまうほど、神はまばゆい存在なのです。

私たちは、真昼の太陽を肉眼で見ることができません。まぶしすぎるからです。まともに見たら、目を傷めてしまいます。神はその太陽をも造られた方なので、神が太陽よりはるかにまぶしく光り輝く方であったとしても、何の不思議もありません。

また、私たちは、宇宙がどれぐらい広いか知りませんが、神はその宇宙をも造られた方なのです。ですから、神が宇宙より広大な方であることも、間違いないことです。

このように、神はちっぽけな人間の想像をはるかに超える方なのです。この方をまともに見ようという発想自体が、実は愚かなことだ、ということがおわかりいただけると思います。

また、神は私たちと違って、完全に聖きよい方です。それに対して、私たちは、心の中に悪いものが満ちている罪人つみびとです（本書の「罪について」を参照）。このような汚れた者が、罪を徹底的に嫌われる神と、まともに向き合うことができるでしょうか。

もし私たちが神を見たら、即、死んでしまおうとしても、それは当然のことです。神が私たちの前に姿を現さないのは、私たちが死なないようにという、神のあわれみなのです。

実は、神は私たちにご自分の存在を示そうとされなかったわけではありません。白い砂浜に足跡がついていれば、あたりにだれもいなくても、そこに人がいたことがわかります。また、ある所に家が建っていれば、そこに大工がいなくても、その家を建てた人がいることがわかります。

それと同じように、神は私たちの前にご自身を現されることはありませんが、ご自分の存在がわかるように、その足跡を残してくださいだったので。その足跡とは、ご自分が造られた物、すなわち、私たち自身と、私たちが取り巻く自然界です。これら神の作品を見ると、そこに神の姿はなくとも、確かに神が存在されるということがわかります。

また、この世に存在するものの中には、目に見えないものが数多くあります。空気は目に見えませんが、確かに存在します。電気も目に見えませんが、電気によって動いているものをおして、その存在を確認することができます。「空気や電気は目に見えないから存在しない」と言う人がいたら、笑い者になってしまうでしょう。

ですから、「目に見えないから神はいない」と言う人は、一見、現実的なように見えて、実は、最も非現実的なことを言っているのです。

さらに神は、ご自身のことを、私たちにわかりやすく、もっと具体的に示してくださいました。それは、ご自分のひとり子イエス・キリストを、私たちと同じ人間の姿で、この地上に遣わされることによつてです。目に見えない神が、目に見えるかたちで、人間の歴史の中に登場してくださったのです。このことについては、後ほど（本書の一章から一四章で）じっくりと考えてみたいと思います。

3 聖書について

聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのためには有益です。

(テモテへの手紙第二・三章一六節)

実際にお読みになったことがある方はおわかりでしょうが、聖書は必ずしも親しみやすい本ではありません。

まず第一に、非常に分厚い本です。それだけで、読もうという意欲がうせてしまうかもしれません。けれども、そんなことではだめだと思い、とりあえず旧約聖書から読み始めたしましょう。最初の「創世記」は、物語になっていたので比較的読みやすいのですが、その次の「出エジプト記」の途中から、だんだんむずかしくなってきました、さらにその次の「レビ記」ともなると、ますますもって、わけがわからなくなることでしょう。

3 聖書について

そこで、気を取り直して、新約聖書から読むことにして、いちばん初めの「マタイの福音書」を開くと、冒頭からいきなり系図で始まり、まったくなじみのない人たちの名前が次々に出てきます。

最後の「ヨハネの黙示録」は、名前はよく知られていますが、中身となると、何が書いてあるのか（特に、初めての方には）さっぱりわからないかもしれませぬ。このような具合に、聖書は、読みやすいとは、お世辞にも言いがたいのです。

けれども、不思議なことに、この非常に取っつきにくい聖書が、実は世界でいちばんよく読まれている本なのです。ある統計によると、聖書は、世界の言語の九十六パーセントにあたる千九百三十八の言語に翻訳されています。また、毎年四千万冊以上、売れているそうです。これは年間の話ですから、トータルでどれだけ読まれているかは、もはや統計が取れないほどです。ギネスブックには、最も多く売れた本、という箇所で、「聖書は除く」と記載されたことがあります。あまりにたくさんの人に読まれているので、対象から外すという意味です。聖書という本は特別扱いなのです。

おもしろい本がよく読まれるというなら話はわかりませんが、そうでない本がここまでよ

く読まれるということは、いったいどういうことなのでしょうか。

一般に、宗教の本はよく売れる、と言われます。それは、その信者が買うからです。けれども、聖書の場合は、わりと値が張ることもあり（と言っても数千円ですが）、信者も、一冊買ってしまえば、続けて何冊も買うことはないでしょう。ですから、毎年それだけの冊数が出版されているということは、信者以外の人が、毎年、新たに手にして読んでいるということになるのではないのでしょうか。

聖書にあまり縁のなさそうなわが国においてさえ、（新約聖書だけというような）分冊を含めると、百万冊ぐらい出版されているそうです。

「聖書を知らなければ、欧米の文化と歴史は理解できない」と言われますので、向学のために読む方も、もちろんおられると思いますが、聖書という本に特別な「何か」がある中で、これだけ多くの人に読み続けられるのではないのでしょうか。その「何か」とはいったい何でしょう。ここで少し、聖書の（他の書物にない）特殊性について考えてみましょう。

聖書は、全部で六十六巻の、大小の書物から成り立っています。執筆者も、執筆年代も、

執筆背景も、それぞれまったく違います。そして、書き始めから完成までの間に、千五百年もの間隔があいています。それなのに、不思議と統一性があるのです。普通、それだけ違う書物が集められた場合、内容がちぐはぐになってもおよそそうなのに、決してそうではありません。まるでだれかひとりの人が書いたようなのです。

また、その中にはいろいろな預言書よげんしょがありますが、それらの預言はことごとく成就しています。たとえば——高校の世界史で習うことですので、ご存じの方もおられると思いますが——紀元前七世紀から紀元一世紀初めにかけて、世界の文明の中心地であったオリエント・ヨーロッパ社会を支配していたのは、ペルシャ帝国、アレキサンダー大王、ローマ帝国といった国家や人物でした。それらの国の勃興ぼつこう、衰退を、聖書はすべて、前もって正確に預言していたのです（ダニエル書二章参照）。

また、ユダヤ人は、紀元七〇年にローマ帝国によって自分の国を滅ぼされ、千九百年近くもの間、世界中に離散していました。そのユダヤ人が世の終わりにもう一度集められるという預言が、旧約聖書の至るところに記されています。それが、一九四八年、イスラエル国家が建設されることによって、（部分的ではありますが）実際に成就したのです（エゼ

キエル書二七章ほか参照)。

そして、最も重要な預言は、私たちを罪から救うためにメシヤ(救い主)が遣わされ、この方が私たち罪人の身代わりとなつて死ぬことでした。この預言は、紀元三〇年に、イエス・キリストが十字架にかかることによつて完全に成就しましたが、実は、キリストが十字架で死なれる七百年以上も前に預言されていたことなのです。

このことを日本に置き換えるなら、鎌倉時代の末期に語られた預言が、二十一世紀の今日、成就するという具合です。とてつもなくスケールの大きな話です。

ある人たちは、この預言の内容がキリストの十字架の場面と酷似しているので、「キリストの十字架以降に、その出来事を知っている人によつて書かれたのではないか」と疑つたそうです。けれどもこの説は、後に、間違いであることがわかりました。二十世紀中ごろに、死海付近の洞窟で、旧約聖書の古い写本が発見され、それが、紀元前、すなわちキリストの十字架以前に書かれたものであることが証明されたからです。これが死海写本と言われるものです。

3 聖書について

こうして過去の預言が驚くべき確率で成就したならば、これから未来に起こることも、必ず成就するはずで、世界は、聖書に記されているとおりに動いていると言っても過言ではありません。

ですから、聖書は、単なる人間が書いた書物の範疇はんちゆうをはるかに越えています。このような書物を書くことができる存在がいるとしたら、それはただひとりです。この世界を創造し、歴史を動かすことのできるお方——すなわち神なのです。

私たちは神を見ることができません。けれども神は、ご自分の意思を私たちに示そうとし、その手段の一つとして、最もわかりやすい、書物という方法をお用いになったのです。世界を造られた神が、もし仮に、書物をとおして、ご自分の意思を全人類に示そうとされるなら、その本は、特定の地域や時代に限定されるものであってはならないはずで、たとえば、日本ではよく読まれているが、海外ではまったく読まれていないという書物ではだめです。反対に、海外のある地域ではよく読まれているが、日本ではまったく読まれていないという場合も同様です。そして、昔はよく読まれていたが、今はあまり読まれていないということでもだめなのです。

(日本を含む)世界中で読まれていて、なおかつ、いつの時代であっても読み続けられる本——それが、神が人類にお与えになった書物としての条件です。そう考えてみますと、世の中にあまたの本はあれど、それに該当する本はたった一冊——聖書しかない、という結論に達するのです。

聖書のように、お世辞にもおもしろいと言えない本が、世界のベストセラーであり続けるのは、神が記された書物だという証拠ではないでしょうか。

私たちは人生の座右の書のことを「バイブル」と呼ぶことがありますが、正真正銘のバイブル、すなわち、実際の聖書を読み、神が私たちにいつたいたいどのようなことを望んでおられるかを、ぜひ知っていただきたいと思えます。

4 人間について

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。(創世記一章二七節)

今日の学校では、(聖書の教えに反する)進化論に基づいた教育が行われています。進化論では、「生物は造物主によって創造されたのではなく、原初の単純な形態から、進化によって、次第に現在のかたちに変化した」と考えます。「単一のものから、すべての生物が生じた」というのですから、「サルと人間の先祖は同じである」、「どの生物も、元をたどれば、みな同じである」ということになってしまいます。人類みな兄弟ならぬ、生物みな兄弟といったところです。

この自然観は、まことしやかに教えられているために、何の疑いも持たずに受け入れられています。学校で教えられていることが百パーセント正しいかという、必ずしもそ

うではありません。特に科学の分野では、新しい発見があると、それまで教えられていたことがしばしば訂正されます。

また、進化論を唱える学者たちの間にも（細部では）さまざまな意見の違いがあり、時代によって、主流となる考えが異なるありさまです。ですから、冷静に考えてみると、進化論には、いろいろと腑に落ちない点が出てくるのです。

そもそも、サルと人間の先祖が同じだという根拠は、外見が似ているということですが、確かにサルは、他の動物よりも人間に似ていますし、行動パターンもよく似ています。けれども、それはあくまで外見の話であって、中身については、両者には大きな違いがあります。

たとえば、人間は死後の世界のことを考えますが、サルはそのようなことはしません。例をあげると、人間の社会では、発展途上の地であろうが、科学が発達した国であろうが、葬儀というものが行われていますが、サルが葬儀を行ったという話は聞いたこともありません。サルの場合には、仲間が死んでも、葬儀らしきものを行うことさえしません。けれど

も、人間の場合は、不思議なもので、地域、文化、歴史が違っても、葬儀が必ずと言っていいほど行われているのです。

それはなぜでしょうか。一般の葬儀の目的には、故人の死を悲しみ、悼むことだけでなく、「死者の霊を慰める」ことも含まれます。ですから、人が葬儀を行うということは、どんな人も、無意識のうちに、「人間には死後の世界がある」ということを知っている証拠ではないでしょうか。「人間は肉体だけの存在ではない。人間には霊もたましいもある。そして、死んだらそれで終わりではないのだ」と知っているのではないのでしょうか。

また、どんな国や地域に行っても、そこには必ず宗教があります。この事実も、「人間には、潜在的に神を求める気持ちがある」ということを証明しています。「宗教はアヘンである」と言つて、神を否定した社会主義思想は、（わずか七十年で崩壊したソ連を見ればわかるように）人間の社会には浸透しませんでした。科学万能と思われる今日でも、人間を超えた存在がいるという考えを否定することができないのです。

このように、神の存在について考えるということは、人間特有のことです。そのような特質は、人間以外の動物には見いだすことができません。サルが何かを拜んでいる姿を見

たことのある人はいないはずでず。

進化論では、そのような人間特有のことは、知能の発達の過程で自然に生まれたと考えます。しかし、自然に芽生えたのなら、そのようなことがまったく見られないケースがあつてもよさそうなものです。けれども、いつの時代でも、どこの地域でも、同じ（人間特有の）習性が例外なく見られるのですから、やはり、人間と他の動物には根本的な違いがあるのではないでしょうか。

聖書には、神が、さまざまな生物を、その種類にしたがつて、お造りになつたことが、はっきり記されています。サルはサル、人間は人間というように、まったく別の生き物として造られたのです。そして、人間は神のかたち（似たもの）として創造されました。似たものとは、「共通の部分を持つ存在、つまり、互いに交わりをすることのできる存在」という意味です。すなわち、人間は、肉体だけでなく、（神と同じように）霊という特殊なものを持つ存在なのです。このような存在として造られたのは、あらゆる生き物の中で人間だけです。このことを理解すると、人間だけが持っている、他の動物にない特質について、

4 人間について

十分な説明がつくのです。

5 死の起源について

ちやうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に……。

(ローマ人への手紙五章一二節)

人間にとつて最もつらいことは、「いつか必ず死ななければならぬ」ということではないでしょうか。生きとし生ける物は必ず死を迎えますが、いざ自分にその時が来ると、どんな人でも動揺するに違いありません。死ぬということは、だれにとつても未知の経験だからです。

死という問題を身近に感じるようになると、「なぜ人は死ななければならぬのか」という疑問が、当然わいてくることでしょう。しかし、この疑問にきちんと答えることのできる人は、おそらく、ほとんどいないはずで

「なぜ、いのちあるものは年を取るのか」

「なぜ、病気のようなものがあるのか」

これらの根本的な原因は、今日の医学でも解明されていないからです。

ところが、聖書はこのような疑問に対して、はっきりと回答を示しているのです。

旧約聖書の「創世記」には、人類の先祖であるアダムとその妻エバの話が出てきますが、皆さんはその話をご存じでしょうか。彼らが、「取って食べたら必ず死ぬ」と神から言われた木の実を、悪魔にそそのかされて食べてしまった、という話です。アダムとエバが木の実を食べたそのとき、神は彼らに対して、こう仰せられました。

「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。……あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない」(創世記三章一九節)。

「土に帰る」、「ちりに帰る」とは、死ぬということですが、聖書によると、アダムとエバが神の命令にそむいて、食べてはならない木の実を食べたそのとき、人間に「死ぬこと」が定められたのです。

ちなみに、この実を「りんご」と思っておられる方もいますが、これは、後世の人が考えた脚色です。聖書には、「善悪の知識の木(の実)」と書いてあるだけです。

この話を聞くと、多くの方が、「これはただの神話だ」とお考えになることでしよう。木の実を一個食べただけで死に定められてしまうなんて、非現実的なことに思えてしまうかもしれません。けれども、この出来事は、人類に罪が入る以前、すなわち、神と直接交わることができた時代のことですから、現在とは環境も大きく異なります。私たちは、人類の歴史のほんの一部分しか経験していませんのですから、有史以前の出来事を、現代人としての感覚だけで判断してはいけません。

そのうえ、この出来事は、神の書物である聖書が語っている出来事です。聖書に書いてあることは、決して支離滅裂なことではなく、むしろ、きちんと筋が通っており、私たちのいろいろな疑問に対して、その答えをはっきりと示しているのです。

それに反して、進化論には、非常にあいまいなところがたくさんあります。人間はなぜ罪を犯すようになったのか、また、いのちあるものはなぜ死んでいくのか、といったことについて、十分に説明することができません。進化論は人間の知恵によって生み出された

ものですから、おのずと限界があるのです。しかし、聖書に書いてあることは、宇宙と地球を創造された神が私たちに示されたことですから、「人間がどれだけかかっても、知ることができないこと」も示すことができるのです。

聖書によると、最初の人アダムが罪を犯してしまった結果、その子孫にも罪の性質が受け継がれ、その性質は、現代の私たちに至るまで、脈々と受け継がれています。アダム以来、すべての人間が罪の性質を持っており、それは、たとえ小さな子どもであったとしても、例外ではありません。ですから子どもは、だれに教えられたわけでもないのに悪いことをしてしまうのです。

また、私たち人間の死は、創造主である神が、罪に対するさばきとしてお与えになったものですから、その原因を医学的に解明することは不可能なことでしょう。それに、もし解明できたとしても、「死」は神によって定められたのですから、私たちがそれを逃れることは絶対にできません。

ですから、私たちが今しなければならぬことは、「なぜ人は死ななければならぬの

か」ということについて考え、その原因が罪であることを理解し、「どうしたら罪の問題を解決できるのか」について真剣に考えることです。悟りを開いたところで、あるいは、「人はいつか死ぬものだ」と割り切ったところで、何の解決にもなりません。

6 罪について

罪とは律法りっぽうに逆さからうことなのです。(ヨハネの手紙第一・三章四節)

「罪」ということばを聞くと、たいていの人は、法律に違反する行為を連想されるのではないだろうか。あるいは、「法に触れないまでも、人に対して何かひどいことをすることだ」とお考えになるのではないだろうか。ですから、前科がある人か、何か良心に責められることのある人でなければ、「あなたは罪人つみびとです」と言われても、ぴんと来ないことでしょう。

ところが、聖書を読むと、罪というもののイメージがまったく違うものになります。罪になるかどうかは、(法律や道徳によつてではなく)神の基準によつて判断されるからです。神の基準は、私たちが考えているよりもはるかに高いので、人間の基準では罪になら

ないことが、神の基準では罪になることがたくさんあります。

その神の基準が具体的なかたちで私たちに示されたのが、旧約聖書に記されている「律法」というものです。律法は、今から三千五百年ほど前に、神が人間にお与えになったものです。律法には非常にたくさん戒めが収められていますが、その代表的なものが「十戒」で、その最初の戒めは次のようなものです。

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない」。

(出エジプト記二〇章三節)

私たち日本人の多くは、まずこの点で、すでに違反していることになりました。日本人は古来、木や石で作ったさまざまな物を神として拜んできたからです。残念ながら、それらは本当の神ではありません。それらを拜んでいる人でさえ、そのことにうすうす気づいておられるのではないでしょうか。

けれども、日本人は、いろいろな宗教に対して寛容な面や無頓着な面がありますから、どのような神を信じていようが、あまり気にならないのです。日本古来の宗教は神道です

が、六世紀に仏教が入ってくると、（最初は衝突もありましたが）やがてうまく共存するようになりました。ですから、家に仏壇がありながら、車には神社のお守りが貼^貼つてある、といったことも、私たちの周りにはよくあるのです。

そのような、ある種のいい加減さも「日本人の長所だ」と考える人もいるようです。けれども、「いろいろな神がいてもよい」と考えることは、「神とは、単なる想像の産物であり、人間の都合のために存在しているにすぎない」と考えることでもあります。

もし神が実在しないのなら、そして、信じた人間の心を豊かにしてくれるだけの存在なら、そのような態度であっても、問題はないかもしれません。

しかし、もし本当に神がおられるなら、そういうわけにはいきません。ほかのものを神とすることは、本当の神に対して、たいへん失礼なことです。もし、子どもが親を無視して、赤の他人に「おとうさん」、「おかあさん」と呼びかけ、その人について行ったとしたら、親は、どのような気持ちができるでしょうか。

私たち人間は神によって創造されました。私たちが住んでいるこの世界は、私たち人間が住むための条件や環境がすべて整っています。空気、水、太陽——これらのものは、す

べて神が私たちのために備えてくださったものです。人間の力では、どれ一つ作り出すことはできません。私たちは自分の力で生きているのではなく、神によつて生かされているのです。

けれども、私たちを生かしていただく神を無視して、ほかの神を拝んだり、「神なんていない」と言っていたりしたら、それは、本当の神に対して、とても不遜な態度を取っていることになります。

では、欧米の国々のような、いわゆるキリスト教国に生まれた人々はどうでしょうか。確かに、彼らは、私たち日本人とは違つて、まことの神以外のものを拝んだりすることはないかもしれませんが、単にそれだけの理由で、特別な扱いを受けるのでしょうか。決してそのようなことはありません。

律法のすべてを守つたとしても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となります（ヤコブの手紙二章一〇節参照）。ですから、神以外のものを拝んだことがなくても、ほかの戒めを守ることができなかつたら、神の前では罪を犯したことになるのです。

十戒の中には、「殺してはならない」(出エジプト二〇章一三節)という戒めもあります。多くの人は、これを聞いて、「今まで人を殺したことはない」とおっしゃるかもしれませんが。しかし、聖書は、「兄弟を憎む者はみな、人殺しです」(ヨハネの手紙第一・三章一五節)と語っています。つまり、人を憎いと思っただけで、殺人と同じ罪を犯したことになるのです。

また、「姦淫してはならない」(出エジプト二〇章一四節)という戒めもあります。これも、別の箇所では、「だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです」(マタイ五章二八節)と語られています。この基準からすれば、ほとんどすべての人が姦淫を犯したことになるでしょう。

そして、「すべてあなたの隣人^{となりびと}のものを、欲しがってはならない」(出エジプト二〇章一七節)という戒めもあります。人のものをうらやましがることさえ、罪となるのです。そもそも、人のものを欲しいという気持ちがあるからこそ、その気持ちが高じて、窃盗、詐欺、横領といった犯罪が起るのです。人の心にあるものが、行動となって表れるのです。法律は行動に表れたことしかさばくことができませんが、神は心の中までご覧になり

ます。

ちなみに、この「兄弟」とか「隣人」といったことばは、自分以外のすべての人と理解すべきです。

そして、これらの戒めは一つの戒めに要約できます。それは、

「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」(レビ記一九章一八節)という戒めです。もし私たちがみな、自分と同じように他人を愛することができたら、世の中から、戦争や犯罪はいっさいなくなることでしょう。

「愛は隣人に対して害を与えません。それゆえ、愛は律法を全うします」(ローマ人への手紙一三章一〇節)とあるとおりです。

しかし、残念ながら私たちには、この戒めを完全に守ることはできません。だれにでも、他人より自分を愛する気持ちがあるからです。私たちは、「自分が大事」、「自分が一番」なのです。しかし、そのような気持ちこそ、罪の本質とも言うべきもので、それはエゴと

も呼ばれています。すべての戦争や犯罪は、他人よりも自分を愛する気持ちの原因となつて起こるのです。

ですから、私たちが人を愛する愛も自己中心的なものです。その人に何らかの魅力があるから、あるいは、その人が自分に何らかの益をもたらすから、愛するのです。何の魅力もない人や、何の益にもならない人を、心の底から愛することができようか。まず無理でしょう。私たちのうちに完全な愛はないからです。

このように、律法を全部守ることのできる人は、この世にはひとりもいません。私たちはみな、神から見れば、生まれながらの罪人なのです。

実は、神が人間に律法をお与えになったのは、それらを完全に守らせるためではありませんでした。むしろ、神の基準を知ることによって、私たち自身が、不完全でみじめであわれな罪人であることを知るためだったのです。

しかし、自分が罪人であることを知ることは幸いなことです。神に近づく大きな一歩となるからです。

7 この世の終わりについて

この天地は滅び去ります。(マタイの福音書二四章三五節)

私たちは、多忙な毎日を過ごしていると、「この世に終わりが来るかどうか」ということなど、あまり考えないと思います。周りの世界が、いつもと同じような平静さを保っていたら、なおさらです。しかし、天災や異常気象などが頻繁に起こると、この世の終わりについて、ふと考えることがあるのではないのでしょうか。

「形あるものはいずれなくなる」というのは、世の中の常識です。そうであるなら、この世界がいつかなくなるとしても、決して不思議なことではありません。たとえば、SF(空想科学小説)の世界では、巨大隕石の接近で、地球が壊滅の危機に瀕するという話がよくあります。一方、現実の世界でも、地球を何回も滅ぼすことのできる核兵器がこの地上に

存在するのですから、自然現象によって滅びる前に、この地球が滅びてしまう可能性もあります。ですから、この世の終わりが来るというのは、まったく現実味のない話ではないのです。

さて、冒頭のことばはイエス・キリストが語られたものです。キリストは、「この天地は滅び去る」と、はっきりと預言よげんされました。私たちは、自分を取り巻く環境がいつもどおりだからといって、安心してはいけません。いつまでもその状態が続くとは限らないのです。この地球の秩序は、（人間の力によってではなく）神の力によって保たれているからです。

文明や科学技術がどれだけ発達したとしても、また、人間の社会がどれだけ繁栄したとしても、「私たちは神の前にはまったく無力だ」ということを忘れてはなりません。たとえば、人間は、天気を予測することはできませんが、天気に対しては何もできません。水不足だから雨を降らそうと思っても、雨雲を発生させることはできませんし、台風の被害を減らそうと思っても、その進路をそらすこともできません。地震に至っては、それを予測することさえむずかしいのです。自然界はすべて神の支配の下にあります。神はそれを意

のままに動かすことができるのですから、人間の築き上げたものを天変地異によって一瞬のうちに破壊することなど、何の造作もないことなのです。

ですから、人間の力を過信したり、神に対して傲慢ごうまんになったりしてはいけません。神は以前、（一家族を除き）全人類を洪水で滅ぼされました。有名なノアの洪水の話です。

ある人たちはこの話をただの伝説だと思っておられるかもしれませんが、箱舟がとどまったと聖書に記されているアララテ山（トルコ、ロシア、イランの国境にある五千メートル級の山）に、箱舟らしきものがあることが、航空写真や衛星写真によって確認されています。

ただ、場所が場所だけに、冬は完全に氷河に閉ざされ、それ以外の季節でも、天気が少しでも崩れると、まったく搜索できなくなってしまうため、（個人による目撃情報はいくつもあるのですが）公式な確認には至っていません。

しかし、箱舟が発見されるか否かは、大した問題ではありません。聖書は神が記した書物であり、そこに書いてあることは間違いのない事実なのです。

私たちは、ノアの洪水のことから、神が何度でもこの世界を滅ぼすことのできる方であることを知らなければなりません。ただし、再び洪水によって滅びるのではないと、はっきり聖書に記されています（創世記九章一一節参照）。

では、この世界は何によって滅びるのでしょうか。今度は、焼き尽くす火によると記されています（ペテロの手紙第二・三章一二節参照）。聖書から判断するかぎり、それは巨大隕石いんせきによるものではないようです。新約聖書の「ヨハネの黙示録もくしやく」には、隕石のようなものが地球上に落ちて来て、さまざまな被害をもたらすことが預言されていますが（八、九章参照）、それで地球が滅びるとは書いてないからです。また、核戦争によって地球が滅びる可能性も少ないと言えます。聖書から判断すると、この地球は（人間の手によってではなく）神ご自身の手によって滅びるからです。その時がいつであるかは、だれにもわかりませんが（マタイの福音書二四章三六節参照）、その時が少しづつ近づいていることだけは確かです。

聖書にこれらのことが記されているのは、いたずらに人々の恐怖心をあおるためではありません。もしそうだとしたら、うさん臭いカルト宗教と何ら変わりありません。聖書に

は、この世の終わりがあることだけでなく、その理由も記されています。この世界が滅ぼされるのは、神が残酷な方だからではなく、私たち人間があまりに罪深いからです。この世界から、戦争や争い、憎しみがなくなることはありません。ノアの洪水の前の世界とまったく同じなのです。世界が滅ぼされる原因は私たちの側にあるのですから、私たちは、自分たちの罪のせいで、この世界が刻一刻と滅びに向かっていることを、ぜひとも知らなければなりません。

8 死後のさばきについて

人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている。

(ヘブル人への手紙九章二七節)

人はいずれ必ず死ななければなりません。これはだれもが認めることですが、「死んだあと、どうなるのか」ということについては、どの人にもそれぞれ考えがあるようです。

最も多いのは、「死んだら無に帰する」という考えです。これがいちばん現実的な考えのように思われていますが、「死後の世界を実際に見た人がいない」ということだけを根拠に、「死後の世界は存在しない」と言い切るのは、いかがなものでしょうか。人間はすべてを見通すことができるわけではありません。「人間は認識していないが、確かに存在

するもの」は、世の中にはいくらでもあります。

一方、死が身近な問題になると、それまで頭の中で考えていたこととまったく違うことを考えることもあります。

たとえば、どこかで葬儀が行われているのを見ても、ふだんは特に何も感じないかもしれませんが、それが親しい人であった場合は、まったく考えが違ってきます。自分にとつて大切な人であった場合は、特にそうです。赤の他人が亡くなったときは、「人間は死んだらそれっきりだ」と思っていたのに、大切な人の死に直面したときには、その人の存在が完全に消滅してしまったとは、とても思えない、なぜか、そのような不思議な気持ちになるのです。

その人の遺体を見ると、姿かたちは確かにその人なのに、本体はすでにそこになく、入れ物だけが残っているような感じですが、そのようなとき、「人間というのは単に肉体だけの存在ではない。肉体とは別の何かが存在するのではないか」と思うのではないのでしょうか。

ある人は、「そのような気持ちで宗教を生み出し、死後の世界を考え出した」と言われます。「死んだ人にまた会いたいという願いが、天国を考え出した」、「この世で悪いことをさせないよう、脅しのために、地獄を考え出した」と。天国と地獄が、人間の便宜で考えられたものにすぎないなら、死後の世界が「ある」と言うのも、「ない」と言うのと、大差はありません。ともに根拠のない話だからです。

結局、「人が死んだら、それで終わりだとは言い切れないが、死後、どのようなことがあるかについては、まったく見当もつかない」というのが、多くの人の実感ではないでしょうか。

では、聖書は何と語っているのでしょうか。聖書は、「天国も地獄もある」と、はつきり教えています。そして、「人間には、肉体だけでなく霊というものも存在し、人が死ぬと、その霊は神のもとに行く」と語っています。

「では、ほかの宗教の教えとどこが違うのか」と思われる方も多いと思いますが、聖書は、宗教という枠の中に納まり切らないほど、人知をはるかに超えた書物です。すべての事情を考慮したうえで、「この本は、神によって与えられたものである」という結論にどうし

ても導かれるのです。ですから、聖書が語る死後の世界は、全宇宙を創造された神が語られたものであって、人間が考え出したものではありません。ですから、聖書の教えは他の宗教と明確に区別することができます。

その聖書が、「人間には……死後にさばきを受けることが定まっている」と語っているのですから、私たちはこのことを厳粛に受け止めなければなりません。私たちは、だれひとり、神の前に罪のない者として立つことはできないからです。神は、私たちが生前行ったすべてのことに対して、厳正なさばきを下されます。聖書には、

「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず……」。

(ローマ人への手紙三章二三節)

と、はっきり記されています。「栄誉を受けることができない」とは、天国に入ることができないということです。

聖書はこのように、「人は、死んだら、みな天国に行ける」という考えを、はっきり否定しています。それどころか、すべての人が罪に対するさばきを受けなければならない、と警告しているのです。聖書には、次のようなことも記されています。

「いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた」。

(ヨハネの黙示録二〇章一五節)

この「いのちの書」には、罪の問題を解決した人の名前だけが記されます。ですから、罪人のままの状態つみびとで、私たちの名前がそこに記されることは絶対にありません。また、この「火の池」とは、世に言う地獄のことです。そこに投げ込まれた者は、昼も夜も、永遠に苦しみを受けなければなりません(ヨハネの黙示録二〇章一〇節参照)。

このような話を聞くと、「神は何と残酷なのだろう」と感じる方もおられることでしょう。けれども、神は私たち人間と違って、まったく罪のない方です。そればかりか、罪を徹底的に嫌われる方です。もし神に少しでも罪があるとしたら、それは本当の神とは言えません。また、罪に対して少しでも妥協してしまうなら、絶対的な正義というものは存在しないことになってしまいます。

天国は、罪がまったくない所です。もし、人間が罪を持ったまま天国に行ったら、そこは、この地上と同じように罪人だらけになってしまいます。ですから、罪が少しでも

あれば、その人は天国に入ることができないのです。

完全に罪のない状態を百点とした場合、百点満点の人だけが天国に入ることができる、ということですが。もし一点でも足りなければ、入ることはできません。九十九点も零点も、罪があることには違いなのです。

世の中には、五十点から六十点ぐらいの人の割合がいちばん多いのではないのでしょうか。そこで、もし仮に、そのあたりの点数の人まで天国に入れるとしたら、どこに線を引いたらよいのでしょうか。六十点で線を引いたら、五十九点の人があまりにもかわいそうです。それで、五十九点に線を引き下げたら、今度は五十八点の人がかわいそうになります。このように、きりがなくなってしまう、挙げ句の果て、零点の人まで、すなわち極悪人まで天国に入れないと、不公平になってしまいます。

ですから、「善人は天国、悪人は地獄」と単純に区別するのは、実はたいへんむずかしいのです。そういう意味では、「少しでも罪を持っていたら天国には入れない」というのがいちばん公平な方法と言えるのです。

死後のさばきに恐怖や不快感を覚え、聖書の話を知ろうとしない方もおられるかもしれ

ません。けれども、聖書がはっきりと死後のさばきについて語っている以上、省くわけにはいきません。そもそも真理というものは、自分に都合の悪いことを語っている場合が多いのです。

聖書の話拒んだ方は、死んでから神の前に立って神の聖きよさにふれたとき、自分が天国に行く資格のない者であることを、身にしみてお感じになるでしょう。

9 悪魔について

暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。

(イザヤ書一四章一二節)

多くの人は悪魔を空想の産物のように考えておられるのではないでしょうか。けれども、聖書には、はっきりと悪魔の存在が記されています。神が確かに存在するように、悪魔もまた実在します。悪魔は、単なる観念などではないのです。

神は悪魔について、このように言っておられます。「あなたは全きものの典型であった。知恵に満ち、美の極みであった」(エゼキエル書二八章一二節)。つまり、悪魔は、この世で最も美しく、賢い存在であるということです。悪魔はもともと天使でした。神が造られたものの中で、最もすばらしいものであったに違いありません。通常思い浮かべる悪魔の

イメージは、子どもの絵本によく出てくる、角つゝやしつぽが生えた姿や、オカルト映画に出てくるような不気味な姿ですが、これは、実際の悪魔とは、かけ離れていることになりました。

では、それほどすばらしい被造物であった天使が、なぜ悪魔になってしまったのでしょうか。聖書は、その理由についてこう語っています。

「あなた（悪魔）は心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう』。しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる」。

（イザヤ書一四章一三―一五節）

つまり、悪魔は高慢になり、神のようになろうとしたため、天から追放されてしまったのです。悪魔が墮天使だてんしと言われるのは、このことからです。ですから、高慢は罪の原点とも言えるものです。ちなみに、冒頭のみことばの「明けの明星」は、英語の聖書では「Lucifer」となっています。悪魔のことをルシファーと呼ぶことがありますが、それはこの箇所から来ています。

悪魔は、天から追放された後、この地上に活動の場を移しました。ですから、目には見えませんが、今この世は、悪魔が支配しているのです。このことは、いつまでたつても、この世から争いがなくなることや、悲惨な事件が跡を絶たないことから、うすうす感じる事ができるのではないのでしょうか。もちろん、さまざまな悲劇の直接の原因は、私たち人間の中にある罪ですが、その罪を助長させているのは、私たちの背後にいる悪魔です。そもそも、人間に罪が入るきっかけを作ったのが悪魔ですから、悪魔はすべての元凶とも言えるのです。

そこで、「なぜ神は、悪魔が墮落した時点で、悪魔をすぐに滅ぼさなかつたのだろうか」という疑問が生じます。そうすれば、人類に罪が入ることもなく、その結果、多くの人が地獄に行かなくても済んだのです。これはおそらく、聖書の最大の謎の一つでしょう。このことについての明確な説明は、残念ながら、聖書には記されていません。

人類に罪が入ったのは、悪魔が人を誘惑したからですが、神の命令にそむくということ自体は、アダムとエバが自分の意思で選択したことです。神はその能力——すなわち自由意志——をも、人にお与えになったからです。彼らは誘惑を拒むこともできました。

まったく誘惑のない状態で神に従うことより、誘惑の中でも神に従うことを選択するという、本当の従順を、神は人に望まれたのではないのでしょうか。ですから、そのことを確認するためにも、悪魔に自由に行動することを許されたのだと思います。しかし、残念ながら、人はその期待に応えることができず、神を裏切る結果となってしまいました。

けれども神は、そのような人間の失敗に対して、ただ傍観するのではなく、その埋め合わせをしてくださいました。悪魔がもたらした破滅から救われる道を用意してくださいました。それがイエス・キリストの救いです。キリストがこの地上に來られたのは、悪魔のわざを打ちこわすためでもありません（ヨハネの手紙第一・三章八節参照）。それだけでなく、悪魔によって破壊された、神と人との関係も修復してくださいましたのです。

このことについては、また詳しく考えたいと思いますが、キリストによって回復された神と人との関係は、アダムが罪を犯す以前の関係よりも、もっと幸いなものです。人が罪を犯す前は、創造主と被造物という関係でしたが、キリストによって回復されてからは、神の子ともとなる資格が与えられるからです（ローマ人への手紙八章一四―一六節参照）。親子のような非常に近い関係へと引き上げられるのです。アダムが犯してしまった罪の

結果は、非常に悲惨なものでしたが、神がそれを償ってくださり、その悲惨さを補って余りある結果としてくださったのです。

悪魔はこの世の終わりに必ずさばかれます。このことは、新約聖書の「ヨハネの黙示録」に詳しく記されています。神が、悪魔の振る舞いをいつまでも放っておかれることは、絶対にありません。悪魔はそのことをはつきりと自覚しているため（マタイの福音書八章二九節参照）、少しでも道連れを増やそうと、悪あがきをしています。つまり、人を少しでも神から引き離そうとしているのです。多くの人が自分の救いに無関心なのは、悪魔がいろいろなものを用いて、真理に目を向けさせないようにしているからです。ですから、この世の流れに流されて、自分の救いに関心がないとしたら、まんまと悪魔の策略にはまっているとと言えるでしょう。

10 神の愛について

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子^{みこ}を遣わされました。ここに愛があるのです。

(ヨハネの手紙第一・四章一〇節)

分厚い聖書の内容をひとことで要約すると、「神は愛である」ということになるでしょう。しかし、神が愛であると言われても、神は目に見えない方ですから、なかなか実感がわかないかもしれません。私たちは何によって、そのことを実際に知ることができるのでしょうか。

まず第一に、私たちがこうして生きていること自体が、神に愛されている証拠です。人類の歴史は、神に対する反逆の歴史と言っても過言ではありません。まことの神を無視し

て、神でないものを神とし、人間同士が互いに争い、傷つけ合ってきました。普通に考えれば、人類はとくに滅ぼされていてもおかしくありません。けれども神は、今日に至るまで、私たち人間が生きていくために必要なさまざまなもの——水や空気、太陽の光、作物など——を与えておられるのです。それは、神が私たちを愛しておられる証拠です。

ある人はこう言われます。「神が愛なら、なぜこの世に不平等があるのか。世の中には、貧しくて飢え死にする人たちだけではないか」。

この言い分にも確かに一理ありますが、このようなことはすべて人間の罪の結果なのです。少なくとも、人類に罪が入る以前は、人間が飢え死にすることはありませんでした。そもそも、死そのものが存在しなかったのです。人は、エデンの園と呼ばれる所で、何の苦勞もなく過ごすことができました。これが、神が人間に与えてくださった本来の環境でした。今の私たちが置かれている環境——飢饉^{ききん}や病氣、災害がある世界——は、神がもともと望まれた世界ではありません。

けれども、現実がこのようになってるのは、人間が神にそむいた結果、罪がこの世界に入ったからです。その時、神は人（アダム）にこう仰せられました。

「土地は、あなたのゆえに、のろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならぬ。土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならぬ。あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、

あなたは土に帰る」。 (創世記三章一七—一九節)

ですから、この世界が私たちにとって楽園でない原因は、すべて罪にあります。私たちはこのことについて、神に文句を言える立場にはありません。

そればかりか、私たち自身が神を悲しませることばかり行っています。そのような私たち罪人が向かう場所は、永遠の地獄です。しかし、神は、私たちが地獄へ行くことを決して望んでおられません。そのような状況から何とか私たちを救い出したいと、切に願っておられるのです。けれども、神の義の性質はそれを許しません。もし神がわずかな罪でも見逃してしまわれたとしたら、絶対的な正義は存在しなくなってしまうのです。ですから神は、私たちを地獄に送りたくないという気持ちと、罪を見逃すことができないご自分の性質との間で、ちょうど板ばさみとなっておられるのです。

このことを説明するためによく使われるたとえは、わが子をさばく裁判官の話です。このようなことは、現実にはあり得ないことですが、仮に、自分の子どもが死刑に値する罪を犯し、自分がその子どもをさばく裁判官に選ばれたとします。当然、親として、せめていのちだけは助けたいと考えます。しかし、私情を交えて事実をねじ曲げるようなことは、裁判官として、職務上絶対に許されません。それで、公正な裁判を行った結果、わが子に死刑を宣告しなければならぬとしたら、その苦悩はどれほどのものでしょう。それこそ、まさに断腸の思いでしょう。

私たちにさばきを下すとき、神もまったく同じ心境でおられるに違いありません。神は、だれひとり地獄に送りたくはないのですが、どうしてもそうしなければならぬとしたら、胸が張り裂けそうな悲しみを経験されることでしょう。私たちが地獄に行かなければならないことは、私たち自身にとってたいへんつらいことですが、それ以上に、神にとってもおつらいことなのです。それは、神の義と私たちの罪という、絶対に相容れない二つのものがもたらす、この世で最も悲惨なことと言えるでしょう。

それでは、神が私たちの罪をきちんとさばいたうえで、私たちを天国に入れてくださる

方法はないのでしょうか。

実はたった一つだけあるのです。それは、だれかが私たちの罪を引き受けて、私たちの代わりに処罰されることです。先ほどのたとえでも、だれかがその子の代わりに罪をかぶって死刑になったら、その子は無罪放免になります（もちろん、このようなことは、実際にはまずあり得ませんが）。神はそれと同じようなことを計画してくださったのです。

ただ、その身代わりは、だれにでも務まるわけではありません。身代わりになる人がないことが絶対条件です。もし罪があつたら、その人自身がさばきを受けなければならぬのですから、他人の身代わりなど、とうてい果たせるわけがありません。借金に苦しんでいる人が、他人の借金を肩代わりできないのと同じです。そうなると、私たち人間の中にだれひとり罪のない人はいないので、私たちが救う方法はないということになってしまいます。

しかし、たったひとりだけ、その条件を満たすことのできる方がおられるのです。それは神のひとり子イエス・キリストです。私たちと違って、この方には罪はまったくありません。唯一、私たちの身代わりとなることのできる方なのです。しかし、いくら資格があ

るからと言っても、愛するわが子を、自分に敵対する罪人たちのために犠牲にすることなど、普通に考えれば、絶対にできないことです。

けれども、そのことを、神は私たちのためにしてくださいました。神は、ご自分のひとり子をこの地上にお遣わしになり、この方を私たちの代わりに、十字架の上で、罪人としてさばいてくださったのです。神を無視し、神が悲しまれることばかりを行ってきた私たちのためにです。

何の価値もない私たちのために、そこまで犠牲を払ってくださった理由を説明できるものがあるとしたら、それこそが「愛」なのです。ご自分のひとり子さえも犠牲にされる愛、私たちに對する神の愛は、人間の愛とは違って、まったく打算のない、完全な、そして真実な愛です。

イエス・キリストが十字架で死なれたことこそ、神がご自分の愛を究極的に現された証拠です。「神が愛であるというなら、その証拠を示してほしい」と言われる方には、このことを、ぜひ知っていただきたいと思えます。

11 神の御子イエス・キリストについて

初めに、ことば（キリスト）があった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

（ヨハネの福音書一章一節）

「イエス・キリスト」と聞くと、たいいていの方は、絵画に描かれている姿を思い浮かべるのではないでしょうか。どの絵を見ても、不思議と、似たり寄ったりの雰囲気をもし出して、ひげを伸ばし、若干面長で、白っぽい服を着て……といった具合です。けれども、聖書には、キリストの容貌に関する記述はいつい出てきません。また、他の歴史的な文献の中にも、そのことに関する記録はまったくと言っていいほど存在しません。

もつとも、キリストがどのような姿をしておられたかということ、大して重要なことではありません。聖書によれば、キリストの人としての姿は、あくまでも仮の姿であり、

本当の姿ではないからです。こう申し上げると、当然のことながら、疑問を感じる方もおられることでしょう。「キリストは単なる人間だ」と思っている人にとって、それ以外の姿があるなどとは思っても寄らないからです。

けれども、聖書を読むと、キリストがただの人間ではないことが、だんだんわかってきます。たとえば、この方は、出生からして普通の人とは違います。聖書によれば、キリストは処女からお生まれになりました（マタイの福音書一章、ルカの福音書一章参照）。このこと自体、常識では考えられない話です。ですから、ある人は、「この話は、後の時代の人が作り出したものだ」と考えます。しかし、キリストが処女からお生まれになることは、キリストが誕生される七百年も前に預言よげんされていたことです（イザヤ書七章一四節参照）。すると、ある人は、「その預言に合わせて、そうした話が作り出されたのだ」と考えます。けれども、ただの「作り話」を信じる人々（クリスチャン）が、二十一世紀の今日に至るまで存在し続けているという事実は、いったいどのように理解すればよいのでしょうか。その中には非常に特殊な人たちが、あるいは、単に迷信深い人たちなのではないでしょうか。その中には、非常に優秀な、科学者と呼ばれる人たちもいますが、彼らが、何も考えずに、「キリ

ストの処女降誕」を盲目的に信じるようになったとは思えません。

キリストが単なる人間でないことは、その生涯を知ることによっても、はっきりとわかります。たとえば、キリストは水をぶどう酒に変えました。目の見えない人の目を開けたり、足の不自由な人の足を治したりしたこともあります。そのうえ、死んだ人をよみがえらせたこともあるのです。このようなことは、普通の人には絶対にできないことです。

これらの奇跡に対する考え方は、二種類に大別することができます。その一つは、「まったくの作り話だ」というものです。あるいは、そこまでは言わないまでも、「後世の人が事実にかなり手を加えた」というものです。キリストが行われた奇跡は、人間には絶対に不可能なことばかりですから、キリストが私たちと同じ人間だとすると、「これらの奇跡は、間違いなく、作り話か誇張だ」という結論に達します。

けれども、これとはまったく逆の考え方もできます。それは、これらの奇跡が実際に起こったと考えて、「もし奇跡の記事が事実に基づくものなら、キリストは単なる人間ではない」と結論づけることです。

そもそも、キリストが地上を歩まれた当時も、奇跡というものは、日常的には起こり得ないことでした。それは今日とまったく同じ状況です。当時は、ローマ帝国が世界を支配しており、非常に高度の文明が発達した時代でした。そのような時代に、実際に起こってもない奇跡の話をでっち上げて、だれも信じなかったことでしょうか。今から二千年前だから、そのような話がすんなりと受け入れられた、ということとは決してないのです。

キリストの奇跡が記されている福音書は、いずれも紀元一世紀に、キリストと実際に生活をともした弟子たちによって書かれたものです。当時は、実際にキリストを見た人たちが、弟子たち以外にも、まだ生きていました。ですから、事実と違うことを書いたら、すぐにうそを見破られてしまいます。ましてや、ユダヤ人の社会でも、ローマ帝国でも、クリスチャンが激しく迫害された時代です。イエスを神の御子として宣べ伝えたら、それこそ、いのちの保証はなかったのです。そのような時に、あえて事実と違う話を作り上げて、自分のいのちを危険にさらす必要があったのでしょうか。そのようなことに意味がないことは、弟子たち自身がいちばんよくわかっていたはずですから、キリストの奇跡の記事を弟子たちの作り話と考えるのは、かなり無理があります。

キリストが私たちの理解できる範囲のことしか行わなかったとしたら、キリストは私たちと変わらない、ただの人間ということになります。けれども、キリストが行ったことは、ただの人間にしては、あまりに偉大だと言わざるを得ません。

キリストが活動された期間は、実質的には、わずか三年余りです。中学か高校に通うほどのわずかな期間で、普通の人ができることと言えば、たかがしれていますが、キリストは、その短い期間で、世界の歴史を大きく変えたのです。しかも、キリストが活動されたのは、パレスチナのごく限られた地域（日本で言えば、四国ぐらいの大きさ）でした。それが、今や、世界中どこへ行っても、キリストのことを知らない人がいないほどです。

そのうえ、キリストは貧しい大工の息子であり、高等な教育を受けたわけでもありません。そのような人物が、世界の歴史の流れを変えるほどの影響を与えてきたのですから——実際、歴史は、キリストの誕生を境に、紀元前、紀元後と大きく二つに区分されています——実に不思議なことです。

もちろん、キリストのことが広く世界に知られるようになった背景には、弟子たちの働きがあります。けれども、彼らがいちがいでキリストのことを伝えようとしたからには、伝えることにそれだけの価値があったはずで、彼らにそこまでさせることのできた何か

が、キリストのうちにあつたのです。

では、弟子たちはいったい何を伝えようとしたのでしょうか。それは次のことです。

「イエスが神の子キリストであること、あなたがあたがが信じるため、また、あなたがあなが信じて、イエスの御名みなによつていのちを得るためである」。

(ヨハネの福音書二〇章三一節)

つまり、弟子たちは、キリストを偉大な宗教家として、あるいは思想家や革命家として宣べ伝えたくてはありませぬ。イエスを神の御子みこ、キリスト(救い主)として宣べ伝えたいのです。イエスが神の御子であるという確信があつたからこそ、彼らはすべてを犠牲にしても、キリストのことを宣べ伝えることができたのです。

キリストが神の御子であるなら、これまでの議論に決着がつけます。つまり、処女から生まれたとしても、また、いかなる奇跡を行ったとしても、何の不思議もありません。むしろ、私たちと同じ生まれ方をしたら、本当に神の御子かどうか、疑わしいものです。そして、神の御子であるなら、奇跡を行うことなど、できて当たり前なのです。

この世界は神によつて創造され、一定の法則の下に保たれています。奇跡というのは、

その法則から外れたことが起こることです。けれども、神には、必要に応じてその法則を
変えることなど、わけもないことなのです。

そして、弟子たちが何よりも伝えようとしたことは、キリストが死後三日目によみがえ
られたことです。キリストの復活は、キリストが神の御子であるという最大の証拠です
(このことについては、後ほど詳しく考えたいと思います)。

そういうわけで、「イエスは神の御子である」というのは、単なるフィクションではあ
りません。私たちが思い描くキリストの姿は、人の姿をとってこの地上に來られた仮の姿
にすぎません。その本来の姿は、神と同様、まばゆく光り輝く姿なのです(ヨハネの黙示
録一章参照)。キリストは、滅び行くこの世から私たちを救い出すために、その栄光の姿
をお捨てになり、私たちと同じ姿でこの世においでくださいました。このことが聖書の中
心的なメッセージなのです。

12 三位一体について

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。

(コリント人への手紙第二・一三章一三節)

「三位一体」ということばは、最近、いろいろな場面で使われ、一般の人にも知られるようになってきましたが、もともとは聖書と関係のある用語です。「神は一つでありながら、父、子、聖霊」という三つの立場を持つ」ということを表すことばです。ただし、このことばそのものは、聖書に出てくるわけではなく、後の時代の人が便宜上作ったものです。けれども、聖書の神のご性質をほば的確に表現しているのです、今日に至るまで、クリスチャンの間で広く用いられてきました。

三位一体のことは、聖書の神を理解するうえで非常に大切なことなので、今回はこのこ

とについて、少し考えてみましょう。

まず、聖書は「神は唯一である」と語ります。これは非常にわかりやすい話です。神はたったひとりしかおられないということですよ（したがって、ギリシャ神話や日本の神話のように、さまざまな神々の存在を認める多神教は間違いということになります）。

けれども、聖書を読んでいくと、唯一の神が三つの立場を持つておられることがわかってきます。それが、先ほども少しふれた「父、子、聖霊」という三つの立場です（マタイの福音書二八章一九節参照）。

「そうすると、神が三つ存在することになるではないか。多神教とどう違うのか」と思う方もおられることでしょう。多神教の神々は、それぞれ別個の存在です。けれども、聖書の神は、三つの立場に分かれて存在しておられるのですが、それぞれがまったく同じ性質を持つておられるので、「神は一つである」ということと決して矛盾しないのです。

このことを説明するために、よく「水」が例として用いられます。水は、状況によって、三つのものに変わります。常温の場合は液体ですが、氷点下になると氷（固体）になり、

沸騰すると水蒸気（気体）に変わります。水、氷、水蒸気は、状態はまったく違いますが、どれもまったく同じものです。それと同じように、神は三つの立場を持っておられますが、その三つの存在は本質的にまったく同じなのです。

この水のとえは、あくまでもたとえであって、三位一体の教えを完全に説明するものではありませんが、理解するための助けにはなると思います。

三位一体の神について説明しているみことばを、もういくつかあげてみます。まず一つ目は旧約聖書からです。

「神は、『われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。……』と仰せられた」。 (創世記一章二六節)

これは、神が人間を創造するときに語られたことばです。神は、ご自分のことを語るために「われわれ」ということばを用いておられます。神は一つなのですから、ご自分のことを一人称で言う場合は、「わたし」ということばを用いるはずですが、それなのに、ここでは「われわれ」と複数形になっているのですから、とても不思議です。しかし、ここで

は、神が、父・子・聖霊という複数の立場から語っておられるのです。つまり、この「われわれ」という表現は非常に不自然なものに思えますが、神が三位一体の存在であるなら、何の不思議もないのです。

もう一つ、新約聖書では、キリストご自身が、父なる神との関係について、

「わたしと父とは一つです」(ヨハネの福音書一〇章三〇節)

と語っておられます。

本来、父と子は別個の存在のはずです。けれども、キリストは、ご自分と父なる神は一つである、と語られました。このことからわかるように、父なる神と子なる神は、独立した存在でありながら、霊的には一つの存在なのです。

父なる神と子なる神についてはすぐに理解できるかもしれませんが、聖霊なる神を理解するのはむずかしいかもしれません。父・子という関係は、私たち自身の親子関係に当てはめて考えることができますが、聖霊の場合は、そういう身近な例がないため、イメージしにくいからです。

実は、聖霊について説明しようとするれば、何冊もの本ができてしまうほど、聖霊に関する教えは奥深いものです。ですから、ここで十分に説明することはできませんが、聖書によれば、聖霊なる神は、父なる神、子なる神とともに、目に見えないところでいろいろと働いておられる方なのです。

一例をあげると、人の心が変わえられ、イエスを主と告白するようになるのは、この聖霊の働きです（コリント人への手紙第一・二二章三節）。また、信者の心に働きかけ、その信仰の成長を助けるのも、聖霊の働きです。ですから、キリストは聖霊のことを「助け主」と呼ばれました（ヨハネの福音書一四章一六節）。

聖霊はいちばんわかりにくい存在ではありませんが、今日の私たちにとっては、このように「助け主」となって働いてくださるいちばん身近な存在なのです。

また、三位一体は、後世の人々が考え出した教えにすぎないのでしょうか。いいえ、決してそんなことはありません。先ほど例をあげましたが、このことを示唆するみことばは、旧約聖書にも、新約聖書にも、いくつも記されています。

たとえば、冒頭にあげたみことばは、父なる神、子なる神、聖霊なる神が同等であるこ

とを示すもので、三位一体の教えの根拠として、最も有名なみことばの一つです。ですから、三位一体の教えは、もともと聖書に記されていることであり、決して人が考え出したものではありません。後世の人は、その事実を三位一体という教理にまとめたにすぎないのです。

三位一体の教えについては、神学者のように学問的に考えるよりも、「神は三つだけけれども一つなのだ」とシンプルに考えたほうが、すっきりしてよいでしょう。人間の頭でこの教えを完全に理解することは、おそらく不可能なことでしょう。神は、全宇宙を創造され、それを支配しておられる方ですが、私たち人間は、宇宙の広さがどれぐらいかということさえ知りません。そのような人間が、万物の創造主であり、保持者である方のことを完全に理解すること自体が、土台無理な話なのです。

ですから、たとえ完全に理解できないことがあっても、「聖書は神の書物であり、そこに書いてあることは真理である」ということを受け入れて、三位一体の教えについても、それをそのまま受け入れることが大切なのです。

13 キリストの降誕について

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができな
いは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになら
たのです。

(ピリピ人への手紙二章六節)

「クリスマス」というお祭りのことは、世界中どこでも知られています。日本の場合は、
クリスマスがとても少ないのに、盛大にこの日を祝っています。けれども、なぜ十二
月二十五日に行われるのかを正確に理解している方は、ほとんどおられないようです。

「この日がキリストの誕生日だから」と思っている方は大勢おられます。しかし、キリス
トが何月何日にお生まれになったのかは、正確にはわかっていません。

ただ、その日が十二月二十五日でないことは確かなようです。なぜなら、キリストがお

生まれになったとき、羊飼いたちが野宿をしていたことが聖書に記されており（ルカの福音書二章八節）、したがって、キリストがお生まれになったのは冬ではない、ということになるからです。ですから、クリスマスは、キリストの誕生日ではなく、キリストがお生まれになった出来事を祝う日、というのが正しいのです。

誕生日でもないのに、どうして十二月二十五日が選ばれたかというと、（当時のローマ帝国で根づいていた）太陽神への信仰と深い関係があります。

この日はちょうど冬至の時期と重なり、この時期を境に日がだんだん長くなることから、当時の人々は、この日を太陽神の誕生日として祝っていました。ところが、キリスト教が国教となつてからも、その思想が人々の間に浸透していたため、それを廃止することができず、そのため、別の名目にするこゝによつて、その祭りの存続を図つたのです。「太陽神の誕生」の代替として選ばれたのが、「キリストの降誕」というわけです。

ですから、クリスマスは、もともとキリストのために設けられた日ではありません。それに、聖書には、キリストの降誕を祝いなさい、とは書いてありませんから、聖書から見れば、十二月二十五日は決して重要な日とは言えません。

もちろん、キリストが人としてお生まれになったこと自体は、たいへんすばらしいことです。それに、その誕生を祝うクリスマスが、多くの人たちにとって、キリストのことを知るきっかけとなってきたことも確かです。

このクリスマスを例に引くまでもなく、神が人となられて、この地上においでくださったことは、実に驚くべき出来事です。神は、この宇宙を支配しておられる方ですが、その方が、（宇宙全体から見れば）ちっぽけなこの地球の上の、さらにちっぽけな人間の姿となられたのですから、そのギャップは計り知れないものです。

神は、宇宙を支配しておられると同時に、小宇宙と言われる人間の体内の細部にまでも、目を行き届かせておられます。まさに、無限大からミクロの世界まで支配しておられる方なのです。ですから神は、宇宙より広大な存在であったとしても、ちっぽけな人間の姿をとってこの地上にお生まれになることも可能なのです。

それはまるで、宮殿に住んでいた人が、ある日突然、四畳半一間のアパートに引っ越すようなものです。あるいは、ロールスロイスに乗っていた人が、軽自動車に乗り換えるよ

うなものです。いや、このようなお粗末なたとえでは表現できないほどの違いを、キリストは経験されたのです。

自分の生活水準を落とすことは、だれにとつても、かなりむずかしいことです。そうしなければならぬ状況に追い込まれた場合は別ですが、みずからの意思では、なかなかできないことです。

たとえば、一国の王子が自分の地位や生活を捨てて、下層階級の人とまったく同じように生活し始めたなら、どうでしょうか。しかも、国民のために汗を流して労苦することを（強いられてではなく）みずからの意思で選択したとしたら、何と立派な王子だろうと思うのではないのでしょうか。

けれども、キリストはそれ以上のことをしてくださったのです。キリストは、一国の王子どころか、神の御子みこです。その方が、栄光ある神のあり方を捨てて、私たち人間と同じ姿をとり、罪人つみびとだらけのこの世界に来てくださったのです。しかも、王様のように、人にかしずかれる生活を送られたのではなく、他の人々のためにしもべとなって働かれたのです。

そのうえ、キリストは、(王族や大富豪ではなく)貧しい大工の家庭にお生まれになりました。しかも、家畜小屋でお生まれになったのです。

なぜキリストはそこまで身を落とさなければならなかったのでしょうか。それはまさに私たちのためでした。キリストがこの地上に来られたのは、私たち人間に仕えるためでした。そればかりか、私たちのためにご自分のいのちを捨ててくださったためだったのです。

キリストが人間とされた最大の理由は、私たち罪人の身代わりとなって死んでくださるためでした。聖書によれば、神はただひとり死ぬことのない方です(テモテへの手紙第一・六章一六節)。ですから、神の御子キリストも、本来の状態であつたら、死ぬことはおできになりません。けれども、わざわざ死を経験してくださるために、人間のからだを持って、この地上に生まれてくださったのです。それは、私たちが、この方の死によって、罪を赦ゆるされ、天国へ行くことができるようになるためでした。

ですから、キリストが人となって降誕されたことは確かにすばらしいことですが、この方が私たちの罪のために十字架で死なれたことは、それよりもさらにすばらしいことなのです。

14 キリストの生涯について

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず……。

(ペテロの手紙第一・二章二二、二三節)

不思議なことに、イエス・キリストに関しては、聖書以外にはほとんど記録が残っていません。一般に、キリストの伝記や研究書は、すべて聖書がもとになっています。ですから、キリストについて正確に知ろうと思えば、聖書を読むのがいちばん確かな方法と言えます。

聖書の中で、キリストご自身について記されているのが、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書ふくいんしょです。福音書には、キリストが語られたことと行われたことが中心に記

されています。ですから、これらの福音書を読むと、キリストがどのような生涯を送られたかがよくわかります。

冒頭のみことばは、キリストの十二弟子のひとり、ペテロという人が記したものです。ペテロは、弟子たちの中でも、キリストに最も近い存在でした。弟子というのは、師に近ければ近いほど、その師の良いところ、悪いところが見えてくるものです。今日でも、芸能人や政治家、財界人といった有名人の暴露本が出版されることがありますが、そういうものを書く人は、たいていの場合、付き人や秘書、直属の部下など、非常に身近にいる人たちです。もちろん、そういう人たちが暴露したことが必ずしも事実とはかぎりませんが、四六時中いっしょにしていると、遠くで見ている人にはわからないことも、いろいろとわかることは確かです。

このペテロは、約三年間、キリストと寝食をともにしました。ですから、もしキリストに何か欠点があれば、いくらでもそれに気づくことができました。けれども、そのペテロが、キリストは罪を犯したことがなかったと、はっきり記しているのです。彼はずっとキリストに付き添っていて、悪いところをまったく見いだすことができなかったのです。

「身近な弟子だからこそ、師を美化して書いたのでは」と考える人もいるかもしれませんが、けれども、ペテロの場合、そうすることには何のメリットもありませんでした。当時の大々的な迫害の中、キリストを美化したり、神格化したりすることは、ローマ帝国の反感を買い、自分の身を危うくするだけでした。あえてそのようなことをして、自分を窮地に追い込む必要があるでしょうか。

反対に、これらのことがみな真実だからこそ、いかに危険な状況に追い込まれようとも、ありのままを伝えざるを得なかったと考えるべきでしょう。

このペテロのあかしによると、キリストはまず、うそさえついたことがないといひのです。

ある所で、うそつきコンテストというものが行われたそうです。その時、優勝した人がどんなうそをついたかというところ、「私は、生まれてから一度もうそをついたことがありません」というそでだったそうです。妙に納得できる話ではないでしょうか。

私たちはだれもが罪の性質を持っているので、程度に差はあったとしても、うそをつか

ない人など、この世にひとりもいません。詐欺のように積極的に人をだますようなことはなくても、自分の立場を守るために、やむをえず小さなうそをつくようなことなら、だれもが経験しているのではないのでしょうか。

けれども、キリストは違います。その口に何の偽りも見いだされなかったのです。まず、この点において、私たちとまったく違うのです。

また、キリストは、ご自分がどんなにばかにされたり、危害を加えられたりしても、相手に報復するようなことはなさいませんでした。このような点も、私たちとはまったく違います。キリストは、

「悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬ほおを打つような者には、左の頬も向けなさい」(マタイの福音書五章三九節)

と教えられました。そのとおりのことを、みずから実践されたのです。

キリストには、悪い人々に対抗するだけの力がなかったのでしょうか。決してそのようなことはありません。天使たちを呼び寄せて、またたく間にそのような人々を蹴け散らすこともできたのです(マタイの福音書二六章五三節参照)。けれども、あえてそのようなこと

はなさいませんでした。抵抗する力が自分自身になくて、無抵抗となることは、決してむずかしいことではありません。けれども、相手よりも力を持っているにもかかわらず、無抵抗に徹することは、容易にできることではないのです。

ましてやキリストは、求められていないものまで与えようとされました。キリストは

「受けるよりも与えるほうが幸いである」(使徒の働き二〇章三五節)

と言われましたが、ご自身が、その教えとまったく同じ生き方をされたのです。

キリストがそうされたのは、自分よりも他の人々を愛することがおできになったからです。人はだれでも、自分のことがいちばん大事です。もし自分の自尊心が傷つけられるようなことがあれば、非常に憤りを覚えます。また、自分自身の権利のためには、必死で闘います。けれども、キリストは、そのようないっさいの自己を放棄されました。自分が何かしてもらうことではなく、他の人に対して何ができるかを、常に考えて行動されました。そして、自分が不利益を被ることがあっても、それで他の人が益を受けるなら、そのことをためらわず実践されたのです。

キリストは数々の奇跡を行われましたが、その奇跡にしても、何一つご自分のためには行われませんでした。あくまでも人々のために行われたのです。私たちなら、もし奇跡を行う特別な力が与えられたら、まず自分自身のためにそれを用いるのではないでしょうか。たとえ他人のためにも用いたとしても、それを自己宣伝や金儲けのために利用しようとするのではないのでしょうか。

キリストは、五千人以上の群衆がお腹をすかしていたとき、五つのパンと二匹の魚を増やして、全員の空腹を十二分に満たされました(マタイの福音書一四章一三―二二節)。しかし、ご自分が空腹のときは、石ころをパンに変えることができたのにもかかわらず、そうなさいませんでした(同四章一―四節)。また、キリストは、ご自分が行われた奇跡について、だれに対してもいっさい見返りを求めず、それらの奇跡を宣伝しようともされませんでした。

このように、キリストは自分というものを完全に捨ててくださり、この地上で奴隷のようになつて人々に尽くしてくださいました。そのうえ、この世から見放されているような人々にも心を留めて、彼らの救いのためにも犠牲を惜しまれませんでした。キリストは損

得勘定をいっさい抜きにして、ご自分を必要としている人々のために必死で労されました。そして、ご生涯の最後に、あの十字架にみずからかかってください、私たち罪人の身代わりとなつて、ご自分のいのちさえ捨ててくださいましたのです。他人のためにここまで自分を犠牲にした人が、はたしてほかに存在するでしょうか。決していいないと断言することができます。

福音書を読むと、キリストがどれほどすばらしい方であるかが、よくわかってきます。キリストの生涯について知れば知るほど、この方が私たち罪人とまったく違うことがわかってきます。私たちは自分の利害や損得を考えに入れながら人を愛しますが、キリストは、何の見返りも求めない完全な愛、まさに神の愛そのものを人々に示されたのです。この方が神の御子であるということは、罪がなく、完全な愛を持つておられることから、おわかりになるでしょう。

15 キリストの十字架について(1)

キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。

(テモテへの手紙第一・二章六節)

イエス・キリストほど有名な死に方をした人は、ほかにいないと思います。たとえば、仏陀(釈迦)やマホメットがどのように死んだかを知っている人は、非常に少ないのではないでしょう(ちなみに、仏陀は老衰、マホメットは病死です)。

普通なら、「どういう死に方をしたか」ではなく、「生前どのようなことを行ったか」がクローズアップされるものです。けれども、キリストが何をしたかを詳しく知らない人はいても、十字架にかかって死なれたことを知らない人は、ほとんどいないことでしょう。キリストの死は、なぜこれほどまでに有名なのでしょうか。

その理由の一つは、多くのクリスチャンが十字架をシンボルにしてきたことでしょう。けれども十字架は、当時、最も悪いことを行つた者がかけられたもので、そもそも死刑の道具なのです。普通に考えれば、非常に不吉なものです。たとえば、わが国では絞首刑で死刑が執り行われますが、首吊りをシンボルにしてそれを掲げたとしたら、とても気味悪がられることでしょう。十字架にも同じことが言えるはずですが、そのように感じられないのは、キリストの十字架の死に何か特別な意味があるからではないでしょうか。

キリストが死なれたのは、「その教えや言動が当時のユダヤ教と相容れず、そのため、宗教的な指導者たちの反感を買い、彼らの陰謀によつて十字架につけられた」というように一般的には理解されています。確かにそのとおりですが、それはあくまでも表面的な理由であり、実際の理由は、もっと深いものなのです。

もし、一般に理解されている理由だけなら、キリストは当時の権力者より弱かったために殺された、ということになります。また、キリストは、社会の流れに逆らつて死んだ、ただの殉教者にすぎないということにもなります。

けれども、聖書を読むと、キリストの十字架という出来事は、単に人間の手によってなされたものでないことがわかってきます。それは、前々から神によって予定されていたことであり、神のご計画の一環として実現したことなのです。

なぜそのようなことがわかるかと言えば、旧約聖書の中に、キリストの死に関する預言（よげん）がはつきりと記されており（詩篇二二篇、イザヤ書五三章など）、キリストご自身も、ご自分の十字架の死を、前もって何回となく予告されたからです（マタイの福音書二〇章一九節など）。キリストにとつて、十字架にかけられることは、予期せぬ出来事ではなく、むしろ初めから覚悟しておられたことだったのです。

ですから、キリストの死は、成り行きで起こったことではなく、むしろこのことこそが、キリストが地上においてになつた最大の目的だったのです。

このように書くと、キリストは、まるで死ぬために生まれて来たように聞こえますが、実際にそのとおりだったのです。もちろん、良い教えを説いたり、奇跡を行つて、困つている人を助けたりすることも、この世に来られた目的の一つでしたが、最大の目的は、やはり何と言つても、十字架にかかつて死ぬことだったのです。

実は、キリストの死にどのような意味があるかを知ることが、聖書を理解するうえで最も重要なことです。冒頭のみことばにあるように、キリストの死は私たち罪人を贖うためであり、そのためにキリストは、どうしても死ななければならなかったのです。「贖う」ということばは、あまり聞きなれないことばかもしれませんが、もともとの意味は、売られてしまった奴隷を、代価を払って買い戻すことです。けれども、そこから転じて、犠牲を払って何かを償うことにも用いられるようになりました。

今日は奴隷制度というものはありませんが、私たちはまるで罪の奴隷のような者です。私たちは、悪いことだとわかっていても、ついそれをしてしまったり、反対に、これは善いことだからしなければいけないとわかっていても、それができなかつたりします。それは、私たちが、自分のうちにある罪の性質に縛られているからです。そして、そのまま知らず知らずのうちに、永遠の滅びに向かって進んでいるのです。そのような私たちのために、キリストはご自分のいのちという最高の代価を払って、私たちが神のもとに買い戻そうとしてくださったのです。

十字架にかかる前に、キリストは弟子たちにこのように言われました。

「一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし

死ねば、豊かな実を結びます」。(ヨハネの福音書一二章二四節)

キリストはご自分を「一粒の麦」にたとえたうえで、ご自分が犠牲にならなければ、多くの人が救われないことを説明されました。もしキリストが死ななければ、私たちはみな永遠のさばきを受けなければなりません。けれども、キリストおひとりが私たちの身代わりとなって死んでくださったことによつて、罪の問題がすべて解決され、(信じるならば)どの人も救いにあずかることができるようになったのです。キリストはご自分の死の重要性をよくご存じだったからこそ、みずから十字架へ向かうことができになったのです。

16 キリストの十字架について(2)

神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。

(使徒の働き二章三六節)

キリストは、他人によって、やむをえず十字架につけられたものではありません。みずからの意思で十字架へと進まれたのです。その証拠に、キリストは、ユダヤ人の陰謀によって捕らえられたときも、不正な裁判にかけられたときも、いっさい抵抗されませんでした。それができなかつたからではありません。自分が正しいことは、いくらでも証明することができたのです。けれども、そのようなことはいっさいなさらず、私たちのために、あえて不当な扱いを甘んじて受けてくださったのです。

それは、ご自分が十字架にかかることが父なる神のみこころであると、はっきり確信し

ておられたからであり、また、私たち人間を罪から救い出すことがいかに大切な使命であるかを、よく自覚しておられたからです。だからこそ、いかなる侮辱や苦痛を受けようとも、黙々と十字架へ進んで行かれたのです。

けれども、十字架にかけられるということは、キリストにとつてたいへんつらいことでした。まず、十字架にかかる前に、背中が畑の畝うねのようになるほど鞭打むちうちたれるのです。次に、自分がはりつけられることになる重い十字架を刑場まで背負むかわされ、刑場に着けば、今度は素っ裸にされ、その十字架に両手両足を釘くぎづけにされ、さらし者にされるのです。そして、死ぬまでの間、何時間も、あるいは何日もの間、痛みと苦しみに、もがき苦しまなければなりません。考えただけでもぞつとします。

この十字架刑は、あまりに残酷なために、やがて廃止となりました。人類史上最も残酷な死刑の方法が、キリストが来られた時期にちょうど実施されており、実際にキリストがその方法によつていのちを落とされたということも、決して偶然ではありません。これは、神が私たちの罪をすべて清算するために、キリストに対して、最も残酷な方法を用意されたということではないでしょうか。

しかも、キリストは、十字架の上ではまったくの孤独でした。ご自分が親身になって面倒を見てきた弟子たちは、恐ろしくなつて、みなキリストを見捨てて逃げてしまいました。

ユダという弟子は、わずかな金に目がくらみ、キリストを裏切りました。また、ペテロという弟子は、キリストが捕らえられ、自分の身に危険が及ぶと、キリストの弟子であることを否定し、「そんな人は知らない」と言いました。

そして、周りは、ご自分をののしる者たちでいっぱいだったのです。

しかし、キリストにとって最もつらいことは、肉体の苦しみを受けることでも、侮辱を受けることでも、人に裏切られることでもなく、最も愛する方、父なる神から捨てられて、この方から罪のさばきを受けなければならないことでした。

キリストは、何よりも罪をお嫌いになりました。そのような方が、その罪を実際に身に負い、ひとりの罪人^{つみびと}としてさばかれなければならないのです。しかも、自分をさばく相手は、最も愛する方、父なる神だったのです。

父なる神とキリストとは、永遠の昔から、深い愛の関係で結ばれていました。キリストの公の生涯で、父なる神はキリストのことを、

「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ」

と二度も証しされました（マタイの福音書三章一七節、一七章五節）。そして、キリストも父なる神のことを

「私と父とは一つです」（ヨハネの福音書一〇章三〇節）

と言われ、常にこの方のみこころを求めて、それを実行することを喜ばれたのです。

けれども、そのような幸いな両者の関係が、十字架の上では真つ二つに引き裂かれてしまいました。昼の十二時から三時までは、全地が真つ暗になり、父なる神と御子イエスは、「さばき主」と「さばかれる罪人」とに、はつきりと分かれたのです。そこには、かつての愛の交わりはありませんでした。全人類の罪を一身に背負われたキリストと、その上に下る、神の容赦のないさばきだけが存在したのです。

そうした中で、キリストは神に対して、

「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」

(マタイの福音書二七章四六節)

と悲痛な叫びを上げなければなりません。もはや、父と呼ぶことさえ許されなかったのです。この世の中で、愛する者と引き離されることほど悲しいことはありません。また、愛する者からひどい仕打ちを受けることも、耐えがたいほどつらいことです。キリストにとっては、父なる神からさばかれることで、まさにその両方が一挙にのしかかったのです。

しかも、自分をのしり、あざけり、苦しめてきた人々の罪のために、その苦しみを味わわなければならなかったのですから、キリストは、何という残酷な仕打ちを受けなければならなかったのでしょうか。

そのつらさは、キリストが十字架にかかられる直前、ゲツセマネと言われる園で神に向かって祈られたときの様子でよくわかります。その祈りの内容はこうでした。

「父よ。みこころならば、この杯(十字架の死)をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください」。

(ルカの福音書二二章四二節)

キリストは、その生涯の中で、ただの一度でさえ、ご自分の願いを神に対してされることはありませんでした。けれども、最後の最後に、たった一つだけ、神に対してご自分の願いをされたのです。それがこの祈りでした。十字架にかかるということは、キリストにとって、それほど悲しく、つらいことだったのです。

実際に、キリストはこの祈りをされたとき、汗を血のように流されるほど苦しわれました。しかし、そのような苦悩の中でも、キリストは神のみこころを最優先されました。そして、ご自分がどうしても十字架にかならなければならないことが示されたとき、十字架へと進むことを、ためらうことなく決心してくださいましたのです。父なる神への従順と、私たちに對する愛とが、この方にその決意をさせたのです。そして、翌日には、あの十字架にかけられ、その十字架の上で六時間もの間、苦しみ抜かれた後、息を引き取られたのです。私たちは、この世でいろいろな苦しみや悲しみを経験しますが、イエス・キリストほどの苦しみ、悲しみを経験した人は、ほかにだれもいないと断言することができます。

では、いつただれのせいで、キリストはこれほどの苦しみ、悲しみを味わわなければならなかったのでしょうか。キリストを十字架につけることを画策した、当時のユダヤ人

の指導者たちのせいでしょうか。それとも、十字架につけることを許可した裁判官のせいでしょうか。あるいは、直接十字架に釘づけたローマ兵たちのせいでしょうか。いいえ、これらの人々は、キリストを十字架につけた張本人とは言えません。

では、いったいそれはだれのせいなのでしょうか。キリストを十字架につけた張本人は、実は、あなた自身なのです。あなたの罪が、キリストを十字架に追いやったのです。もしあなたに罪がなかったら、キリストはあのような苦しみに遭わなくてもよかったです。

あなたはおっしゃるかもしれません。「いいや、自分以外にもいっぱい人がいる。人類は何十億といえるではないか。それらの人々も同罪ではないか。自分には、その何十億分の一の責任しかないはずだ」。いいえ、決してそんなことはありません。仮に人類があなたひとりしかいなくても、キリストは間違いない、あなたのために死なれたはずです。キリストにとつて、あなたはかけがえのない存在だからです。他の人はまったく関係ないと言つてよいのです。私たちは、あくまでも個人的に、キリストと向き合う必要があるのです。

あなたにとっていちばん大切なことは、キリストがあなた自身の罪のために死なれたという事実を素直に受け入れ、「この方こそ、私の救い主である」と認めることです。あなたを愛し、あなたのためにこれほどの苦しみを受け、ご自分のいのちさえ捨ててくださったキリストの尊い犠牲を、決してむだにしてはならないのです。

17 キリストの復活について

今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。

(コリント人への手紙第一・二五章二〇節)

重い病氣と闘った後、絶望の淵かちから回復された方の話をよく聞きます。そのような話は確かに感動を誘いますが、冷静に考えてみると、いくら病氣を克服したとしても、いつかは必ず死を迎えなければなりません。人間は死の前にはまったく無力です。したがって、少し冷めた言い方に思われるかもしれませんが、病氣を克服するということは、死という問題を先延ばしにすることと同じではないでしょうか。

ただ、「少しでも長生きしたほうが、いろいろなことができるわけだから、死を先延ばしにすることも、決してむだなことではない」と言えるかもしれません。ですから、多く

の人は、できるだけ長生きをして、人生を楽しんだり、何かを全うしたりしようとするのです。

しかし、いくら長く生きられたとしても、残念なことに、死を迎えるときには、人生の思い出も、自分が築き上げたものも、全部置いていかなければなりません。さらに、寂しいことに、よほど特別な人でもないかぎり、死んだあと、時間の経過とともに忘れ去られてしまうのです。

時の権力者たちの多くは、死を非常に恐れました。一般の人たちと違って、この世に残していかなければならないものが多いのですから、当然のことでしょう。かの秦しんの始皇帝しこうていが、晩年、不老不死の薬を探し求めたという話は有名です。結局、彼はその薬を見つけないことができず、他の人々と同じように死んでいきました。中国全土を支配したとしても、死を免れることはできなかったのです。

このように、人生で多くのものを得れば、それだけ死はつらいものとなります。短い人生だからこそ、「死んでも悔いのないよう、人生を充実させよう」と一生懸命になるのですが、人生が充実したものになればなるほど、死ぬことがつらくなるのですから、皮肉な

ものです。ですから、死というものが存在するかぎり、何の不安もなく幸せに暮らすという事は、絶対にあり得ないのです。

しかし、ここに幸いなニュースがあります。死んでから、みずからよみがえった方が、たったひとりだけおられるのです。それが事実なら、その方は、人類史上初めて、死そのものを克服されたこととなります。数々の偉人が成し遂げたことよりも、はるかにすばらしいことを成し遂げられたのです。その方がだれかと言えば、その方こそイエス・キリスト——私たちの罪を背負ってあの十字架で死なれた方——なのです。

キリストが十字架で死なれたのは有名な話ですが、その後どうなったかについては、あまり詳しくご存じない方も多いと思います。

キリストは、十字架で息を引き取られた後、アリマタヤのヨセフという人の墓に葬られました。当時の墓は横穴式の洞穴のようなもので、遺体はそのまま墓の中に安置され、入り口には大きな石が置かれました。そして、ローマ兵が墓のそばで見張りをすることになったのです。

なぜローマ兵が置かれたかと言えば、キリストが、ご自分が死んで三日目によみがえることを何度も予告しておられたからです（マタイの福音書一六章二節ほか）。それで、キリストを憎むユダヤ人の指導者たちは、弟子たちがその予告を実行するためにキリストの遺体を盗むといけないと考え、ローマの総督に依頼して、番兵たちに墓の番をさせたのです。ですから、「弟子たちがキリストの遺体を盗んで、キリストが復活したことにした」という説が成り立たないのは明らかです。

ところが、三日目の朝、イエスを慕う女性たちが墓へ行ってみると、墓の石は転がされており、ローマ兵の姿も見当たりませんでした。聖書によると、突然天使が現れ、ローマ兵たちは恐れをなし、逃げ出してしまったのです。

その女性たちの中のひとり、マグダラのマリヤは、だれかがキリストの遺体を持ち去ってしまったと考え、泣いていたところ、彼女に呼びかける人がいました。マリヤは、それがだれだかわかりませんでした、その人から「マリヤ」と呼びかけられたとき、それがよみがえられたキリストだと、はっきりとわかりました。

——イエス様がよみがえられた！

マリヤは大喜びで弟子たちにこのことを告げ知らせましたが、弟子たちはだれもその話を信じようとしませんでした。

けれども、同じ日に、キリストは弟子たちにも姿を現されました。弟子たちはユダヤ人を恐れて一室に閉じこもっていました。そこにキリストが、よみがえられた姿を現され、「平安があなたがたにあるように」と言われたのです（ヨハネの福音書二〇章一九節ほか）。キリストは、両手と、ローマ兵が槍で突き刺したわき腹（十字架にかかられた証拠）を弟子たちに示されました。ですから、「よみがえったというキリストは、実は替え玉だった」という説も成り立ちません。

また、キリストがわき腹を槍で突き刺されたのは、絶命したことを確認するためでしたから、その傷跡があるということは、「キリストは一時的に仮死状態になり、それから蘇生した」ということもあり得ないことです。

さらに、キリストは、ご自分が幽霊や幻でないことを証明するために、その場で焼いた魚を食べられました。ですから、このことによって、「弟子たちは幽霊や幻を見た」という説も否定されるのです。

そして、極めつけは、五百人以上の人々のいる所で、キリストが、よみがえられた姿を現されたことです（コリント人への手紙第一・二五章六節）。数名の目撃者なら、幻覚を見ることもあるかもしれません。目撃者がわずかしかないなら、その人たちが共謀して、うそをついているということも考えられます。けれども、五百人以上もいたとすると、その可能性は否定されるでしょう。このように、キリストがよみがえられたことは、あらゆる角度から考えて、疑う余地のないものなのです。

ただ、これまでの話はすべて、聖書に書かれていることをもとに考えたものです。ですから、「聖書に書かれていることそのものが、フィクションだった可能性もあるのでは」と疑問を抱く方もおられると思います。

そこで、新約聖書に収められている弟子たちの手紙は、「彼らがユダヤ教に代わる新しい宗教を作ろうと考え、キリストがよみがえったことにして書かれたものだ」と仮定しましょう。もしそれが事実なら、そのせいで、おびただしい数の殉教者が出たことになりま

す。その人々は、弟子たちがうそをついたために、いのちを落としましたのですから、弟子た

ちは、とんでもない罪作りなことをしてかしたことになります。普通なら、彼らは良心の呵責に耐え切れなくなり、途中で、だれか真実を暴露する者が現れても、不思議ではありません。けれども、そのような者はひとりもいませんでした。ですから、弟子たちが全員最後までうそをつき通したか、あるいは、彼らが書いたことが真実であったか、そのどちらかということになるでしょう。

けれども、もしキリストがよみがえられたということが弟子たちの創作であったとすれば、彼らは、「偽りの証言をしてはならない」(出エジプト二〇・16)という、(ユダヤ人にとつて最高の律法である)十戒の重要な一つを破ったことになります。ユダヤ人でもある彼らが、神の律法にそむき、そのような大それたうそをつくとは思えません(コリント人への手紙第一・一五章一五節)。

また、弟子たちの態度の変化も、キリストの復活を裏づけるものです。彼らがキリストに最後までつき従うほど意志の強い者たちであったら、いのちを張って何かをするということも考えられます。けれども、キリストが十字架にかけられたとき、彼らは恐れをなし、散り散りになって逃げてしまったのです。

ところが、そのような弟子たちが、その後しばらくすると、突如、人が変わったように大胆にキリストの復活を証しかしするようになったのです。彼らに、いったい何が起こったのでしょうか。弟子たちを変える、何か強烈な出来事があったとしか考えられません。もしそのような出来事があるとしたら、キリストがよみがえられたことしか考えられないのです。

このように、聖書が弟子たちの創作である可能性はあり得ないと考えてよいのです。

では、キリストがよみがえられたことは、どういうことを示しているのでしょうか。

第一に、キリストが神の御子みこであることを示しています。もしキリストが復活されなかったら、(生前、どれほど素晴らしい奇跡を行われたとしても)結末は他の人と何も変わらないこととなります。キリストとともに世界三大聖人として並び称される仏陀ぶつだ(釈迦しや)とマホメットは、決してよみがえりませんでした。彼らの中から墓の中で朽ち果てましたが、キリストはそうではありませんでした。死後、三日目に、肉体をもってよみがえられたのです。キリストと他の聖人たちとの決定的な違いは、ここにあるのです。

キリストが行われた数々の奇跡によっても、この方が神の御子であることが十分証明さ

れましたが、復活されたことは、ほかのどの奇跡よりも、はるかにすばらしいものです。

第二に、キリストのよみがえりは、復活が現実のものであることを示しています。もしキリストがよみがえらなかつたら、復活は単なる絵空事でしかありません。その場合、死んだらそれで終わりです。しかし、キリストの復活が事実であるがゆえに、この方を信じる者は、「私が死んでも、キリストと同じようによみがえる」という希望を持つことができるのです。

第三に、キリストを信じた者の救いが確かなものであることを示しています。もしキリストが墓に葬られたままだったら、救いのみわがが本当に完成したのかどうか、確認のしようがありません。

けれども、キリストがよみがえられたことよって、この方を信じた者は、罪の問題が確かに解決されていることを、はっきりと確信することができるのです。

18 キリストの昇天について

イエスは彼ら（弟子たち）が見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなりました。

（使徒の働き一章九節）

キリストは、十字架にかかって後、三日目によみがえられました。では、今はどこにおられるのでしょうか。

聖書によると、まずキリストは、よみがえられてから四十日間、弟子たちの前にご自分の姿を現されました。相当の数の人々がキリストの復活を目撃しました。その期間は決して短くはありませんでした。このことによっても、キリストの復活が確かなものであることがわかります。弟子たちが幻を見たというようないい加減なものではないのです。四十日にもわたって、幻を見るということは考えられないからです。そして、その間、キ

リストは神の国について弟子たちいろいろなと教えていただきました。そして、四十日がたつて、弟子たちの見ている前で天に上つて行かれ、やがて雲に包まれ、見えなくなられたのです。これが「キリストの昇天」です（使徒の働き一章参照）。ですから、キリストは、今は天におられるのです。

キリストは、天にお帰りになつてから、何をされたでしょう。

まず、天に帰られてから十日ほど後に、この地上に聖霊を遣わされました。聖霊は、三位一体の神のおひとりです。この聖霊が弟子たちに下ると、彼らはキリストの復活を大胆に語り始めました。弟子たちは、習つたこともない外国のことはでキリストのことを証しました。「異言」と呼ばれるものです。そのとき弟子たちがいたエルサレムには、世界中からユダヤ人が集まっていましたので、自分たちがいた国のことばで弟子たちが話すのを見て、非常に驚きました。これらは、すべて聖霊の働きでした（使徒の働き二章参照）。

これは余談ですが、聖霊が下つた当初は、異言を語ったり、奇跡を行つたりする力が弟子たちに与えられましたが、やがてそのような力はだんだん使われなくなつていきました。神

の啓示が完全に表された新約聖書が完成するにつれて、証^かしの働きは「奇跡」から「聖書のみことば」へとバトンタッチしていったのです。

ある方は、「なぜキリストがよみがえられたのなら、そのままずっと地上に残って、自分を人々に現さなかったのか」と言われるかもしれませんが。

けれども、キリストは弟子たちにこのように言われました。

「わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主（聖霊）があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします」。

（ヨハネの福音書一六章七節）

もし、キリストが肉体を持ったまま、この地上におられたとしたら、その働きは非常に限定されることでしょう。たとえば、同時に何か所にも存在するということはできません。けれども、聖霊にはそのような制約はありません。霊ですから、いつ、いかなる場所にも存在することができるのです。キリストの昇天後、弟子たちは世界各国に散らばって宣教を行いました。彼らのそれぞれの働きを支えるためにも、聖霊が遣わされなければなら

なかつたのです。

それなら、「キリストと聖霊が、この地上でいっしょに働けばよいではないか」と考える人もいるかもしれませんが。けれども、キリストは、どうしても天にお帰りになる必要があります。そこで行わなければならない別の働きがあつたからです。キリストは弟子たちにこのように言われました。

「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかつたら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです」。

(ヨハネの福音書一四章二節)

今、キリストは天国で、そこに迎えるべきすべての人のために場所を用意しておられます。この「住まい」ということは、英語では「mansions(豪邸)」と訳されています。キリストを信じる人々のために、天に豪邸が用意されているというのです。それは、この地上のどの宮殿や城よりも、もっとすばらしいものであるに違いありません。

キリストは続けて、このようにも言われました。

「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです」。(同三節)

キリストは、「準備が整ったら、私たちを迎えに来る」と約束してくださいました。キリストが天に帰られてから二千年近くたちますが、まだこの約束は果たされていません。約束が果たされていないということは、天に迎えられるべき人がまだ残っているということです。その人々のために、キリストは準備をしておられるのです。ですから、キリストが二千年間来られないからといって、その約束が反故（まが）にされたわけではありません。神にとって、千年は一日のようなものなのです（ペテロの手紙第二・三章八節参照）。

やがてこの世の終わりが来ます。けれどもその前に、キリストが天から下って来られ、信じた人々は雲の中に一挙に引き上げられ、空中でキリストと会うことができます（テサロニケ人への手紙第一・四章参照）。このことは、キリストを信じるクリスチャンにとって最大の希望なのです。

19 永遠のいのちについて

わたし（キリスト）は彼ら（クリスチャン）に永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。

（ヨハネの福音書一〇章二八節）

世の中の宗教は、「病気が治る」、「お金が儲かる」、「良縁がある」といった、いろいろな利益を売り物にしています。そのようなものは、ことごとく、死によって失われてしまうものばかりです。病気が治っても、人はいつか必ず死を迎えます。お金が儲かって、良縁が見つかって、それらは全部、死によって失われるのです。

ですから、人間にとって最も大切なことは、死によっても失われることのないものを入れることではないでしょうか。キリストが私たちに与えようとしておられるのは、ま

さにその失われることのないもの、すなわち、永遠のいのちなのです。

もし、永遠のいのちにそれほど魅力を感じないとしたら、それは、その価値があまりわかっていないからではないでしょうか。この世で欲しいものがたくさんあり、それを追い求めるのに一生懸命で、それを手に入れたあとのことなど、考える余裕もないのでしょうか。けれども、この世のものを手に入れたとしても、必ず何かむなしさが伴うものです（一時的な満足や達成感はあるかもしれませんが）。そして、そのむなしさを紛らわすために、それに代わるものを次々に求めていくのです。人生は、その繰り返しと言ってもよいでしょう。

この世のもので十分満たされたとしても、「いつかそれを失ってしまうかもしれない」という不安と闘わなければなりません。ですから、この世で欲しいもの全部を手に入れた人たちが最後に欲するのが「永遠のいのち」なのです。それなら、この世のものをあれこれ追い求めるのではなく、まず、この最も大切なものを手に入れることを考えたほうが、はるかに賢明ではないでしょうか。

「キリストはこのように言われました。」

「人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありません。そのいのちを買い戻すのには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。」

(マタイの福音書一六章二六節)

実は、この「まことのいのち」、すなわち永遠のいのちを、どのようにしたら手に入れるのかを知ることが、聖書を読む目的でもあるのです。聖書が書かれたのは、それを読む人がイエス・キリストを自分の救い主として信じ受け入れて、永遠のいのちを得るためだからです(ヨハネの福音書二〇章三一節参照)。

では、永遠のいのちとは、実際にはどのようなものなのでしょうか。また、具体的にどのように幸いなのでしょうか。

聖書によると、永遠のいのちを与えられた者は、朽ちないからだを手に入れることができます(コリント人への手紙第一・一五章三五―五八節参照)。私たちの今のからだは、ある年齢を超えると、だんだん衰えていきます。病気をしたり、やがて死によって朽ち果てていきます。しかし、その朽ちないからだには、これらのことがまったくありません。それは、キリストが肉体を持って死から復活されたときのからだと同じようです。そのからだ

は、もはや死を経験することがありません。キリストを信じた者は、朽ちない、すばらしいからだを手に入れることができるのです。

たとえ現在、自分のからだにコンプレックスがあつたとしても、病気や障害があつたとしても、まったく心配する必要はありません。やがて、何一つ欠点のない、まったく新しいからだに造り変えられるからです。

永遠のいのちを手に入れた人は、永遠を、新しい天と新しい地（いわゆる天国）で、キリストとともに過ごすことができます。そこはいっさい罪のない世界で、私たちがこの世で経験するような苦しみ、悲しみはまったく存在しません。そこには神とキリストが中心におられ、太陽のように光り輝いておられます。そこで、神とキリストとの愛の交わりを永遠に持ち続けることができます（ヨハネの黙示録二一、二二章参照）。

キリストと私たちの関係が引き裂かれることは絶対にありません。永遠という「時間」をかけても、キリストのすばらしさを知り尽くすことはできませんし、キリストの愛も永遠に変わらないからです。ですから、永遠のいのちを手に入れるということは、単に永遠に生きるということではなく、私たち自身が完全なものへと変えられ、最も楽しい時を永

遠に過ごせるようになるということなのです。

けれども、もし永遠のいのちを手に入れることができなかつたら、そのときはどうなるのでしょうか。神から引き離され、まったく正反対の立場になるのです。すなわち、火と硫黄いおうの池に永遠に投げ込まれ、その中で永遠に苦しまなければならぬのです。そこは、神の愛も恵みもまったく存在しない所です。永遠のいのちが与えられた場合と比べて、何と対照的なことでしょうか。まさに天と地ほどの開きがあるのです。

だからこそ、今、生きているうちに、イエス・キリストを信じ受け入れ、この永遠のいのちを何としても手に入れなければならないのです。ほかのものを追い求めることによつて、いちばん大切なものを失ってしまったとしたら、永遠に後悔することになるのです。

20 信仰について

見ずに信じる者は幸いです。(ヨハネの福音書二〇章二九節)

何かのきっかけでキリスト集会(教会)へ行くようになり、そこで聖書の話聞いてみると、クリスチャンがどのようなことを信じているのか、聖書の語る救いとは何か、そして、救われるためにはどうしたらよいのか、といったことは、だんだんおわかりになるでしょう。

救われるためには、まず、キリストの福音ふくいんについて語られていることをきちんと理解することが非常に大切です。まことの神がおられること、神の前に自分が罪人つみびとであること、私たちが救うために、神がそのひとり子イエス・キリストを遣わしてくださったこと、この方が私たちの代わりに十字架で死なれ、三日目によみがえられたことを、はっきりと理

解しなければなりません。これは、聖書が伝えていることの中で、最も重要なことなので
す。

しかし、単にそのことを理解しただけでは、決して救われたことにはなりません。聖書
の話を理解することと、それを信じ受け入れることとは、基本的に別のことです。前者の
場合は、聖書が何を言っているのか、ということが頭でわかりさえすればよいのですが、
後者の場合は、聖書の話が百パーセント真実であることを心から受け入れる必要があります。
特に、キリストが十字架にかかって死なれたのが自分の罪のためであったことを、
はつきりと自覚しなければなりません。

キリストは次のように言われました。

「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようになら
ない限り、決して天の御国みくにには、はいれません」。 (マタイの福音書一八章三節)

救われるためには、どうしても子どもになる必要があります。子どもには「素直
である」という特徴があります。幼い子どもは、親の言うことを素直に受け入れます。理

屈で考えてからではなく、親がそう言っているから、という理由で、そのまま受け入れます。同じように、聖書の話も、「神が語っておられるのだから」と、素直に受け入れることが大切なのです。

もちろん、「聖書が語っていることは正しいのだろうか」と自分なりに吟味してみることも大切です。やみくもに何でも信じればよいというわけではありません。悪魔は、いろいろな偽物をとおして、多くの人の目を真理から遠ざけようとします。ちまたには、人の弱みにつけ込む新興宗教があふれていますから、そうしたものに十分警戒しなければならぬことも確かです。ですから、聖書の場合も、最初から何でも鵜呑みにするのではなく、いろいろ疑問を持つて、それを一つひとつ、つぶしていくことが必要でしょう。聖書には、いくら読んでも、よくわからないところがたくさんありますが（聖書に書かれていることを全部理解している人など、ひとりもいません）、決して荒唐無稽な書物ではないということはわかっていただけたらと思います。

そのように吟味を重ねたうえで、聖書が信じるに値するものだとなら、たとえ、そこに書かれてあること全部を理解できなかつたとしても、最後にはそれをそのまま真実のこととして受け入れればよいのです。それが信仰なのです。

よみがえられた姿をキリストが弟子たちに現されたとき、トマスという弟子はたまたまそこに居合わせず、その姿を目撃することができませんでした。ですから彼は、他の弟子たちが

「私たちは主を見た」

と言つても信用せずに、次のように言いました。

「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」。(ヨハネの福音書二〇章二五節)

その時の彼は、キリストの復活を信じない今日の人々の代弁者そのものでした。

ところがキリストは、よみがえられたご自分の姿を、その後、トマスにもはっきりと現されました。さすがのトマスも、キリストの姿を実際に目の当たりにすると、復活が紛れもない事実であることを認めざるを得ませんでした。そして、キリストに対して、

「私の主。私の神」(同二八節)

と告白したのです。そのときキリストが彼に語られたのが、冒頭に記した

「見ずに信じる者は幸いです」

というみことばです。

トマスには「復活の証人」として働く必要があつたため、キリストはよみがえられた姿を彼に現されましたが、今日の私たちには、そのようになさることはありません。聖書という神の証言集がすでに完成しているため、その必要がないからです。代わりに神は、私たちが、聖書に書いてあることをそのまま信じ受け入れることを望んでおられるのです。

もしだれかが自分のことを全面的に信用してくれて、自分が言つたことを疑わずにそのまま受け入れてくれたら、うれしく思うのではないのでしょうか。反対に、「何か、証拠を見せろ」と言われたら、あまりいい気分はしないことでしょうか。信用されるということは、人にとって喜びです。それは神にとつても同じことではないでしょうか。ですから神は、信仰を持ってご自分に近づく人を喜んで受け入れてくださるのです（ヘブル人への手紙一章六節参照）。

21 悔い改めについて

あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。

(使徒の働き三章一九節)

人が神のもとに立ち返るために、どうしてもしなければならぬことがあります。それは、自分自身の罪を悔い改めることです。悔い改めることなしに、人が救われることは絶對にありません。

小さな子どもが悪いことをしたとき、親が子どもに求めることは何でしょうか。その子が素直に「ごめんなさい」と言うことではないでしょうか。

神は罪を忌み嫌っておられます。ですから、私たちを愛していても、罪を持ったままの

私たちを受け入れることはなさいません。私たちのうちにある罪は、神との間の非常に大きな障害となっております。

けれども神は、私たちが自分の力で罪の問題を解決できないことを、よくご存じです。だからこそ、今から二千年前にキリストをこの地上に遣わし、この方を十字架につけることによって、贖いのみわざを完成してくださったのです。

ですから、私たちが罪の赦しを得るための条件は、もはや完全に整っています。あとは、「キリストの十字架の死は私の罪のためであった」と認め、神の前に悔い改めることだけが残っているのです。

たとえば、子どもがいたずらをして、他人の家の物を壊してしまったとしましょう。子どもにはそれを弁償することができませんから、親が弁償することになり、その子がしでかした不始末については、その時点で、きちんと処理されたこととなります。

しかし、その子に少しも悪びれたところがなく、反省の色が見えないなら、親は、弁償が済んだからといって、その子をそのまま赦すことができるでしょうか。決してできないと思います。自分が悪いことをしたということをも十分に理解し、心から反省することを、

親はその子に望んでいるからです。

同様に、神も、罪の問題そのものに関して、キリストの十字架において、すでに解決していただきました。あとは私たちが神の前に悔い改めるのを待っておられるのです。けれども、もし私たちが悔い改めなかったとしたら、いくら罪の贖いが完成していたとしても、神は私たちを受け入れることができません。

まず、私たちが本当に心から悔い改めるには、自分自身の罪をはっきりと自覚しなければなりません。キリストは、

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです」

(マタイの福音書五章三節)

と言われましたが、このことばは、自分の罪を自覚できる人のことを指しています。自分が罪人であることが素直に自覚できる人は、本当に幸いです。

福音書を読むと、人々から尊敬されていた宗教指導者たちよりも、人々からさげすまれていた遊女や取税人たちのほうが、多くキリストのもとへ来たことがわかります(当時の

取税人は、統治国のローマに雇われ、同胞のユダヤ人から、必要以上に高額の税金を取り立てていましたので、罪人の代名詞のように思われていました。それは、彼らのほうが、宗教指導者たちよりも、自分の罪深さを自覚していたからです。

人の目から見れば、「宗教指導者たち」と「遊女や取税人たち」には、大きな差があるように思えるかもしれませんが、神の目から見れば、そんなに大きな違いはないのです。

たとえば、身長二メートルの人と一メートルの子どもを、人間の視線から見たとしたら、背丈の違いをずいぶん感じますが、高層ビルのでっぺんから見下ろせば、ふたりとも豆粒のようなものです。一メートルの差など大した違いではありません。人間同士の違いなど、神の目から見れば、この程度のものであります。

ある人が天国へ行くか、それとも地獄へ行くかは、その人がどれだけ善いことをしたか、あるいは悪いことをしたかによって決まるのではなく、その人に罪があるか、ないかだけによって決まるのです。そして、少しでも罪があつたら、その人は地獄へ行かなければならないのです。

地獄でのさばきは、当然のことながら、地上で犯した罪に応じて行われます。悪いことをたくさん行えば、それだけ罰も重くなります（マタイの福音書一章二二、二四節参照）。この地上で善いことをした人と、悪いことばかりをした人が、まったく同じ扱いを受けることはありません。神は決して不公平な扱いをなさらないからです。けれども、罪を悔い改めないかぎり、地獄へ行かなければならないということだけは、どんな人にも当てはまるのです。

ですから、「私には罪はない。悔い改める必要もない」と考えていた宗教指導者たちのほうが、罪人として扱われていた遊女や取税人たちよりも、たちが悪かったと言えます。彼らは、「私たちは、今のままでも救いに値する」と考えて、悔い改めようともせず、自分たちが罪人とみなす人々を見下していたのです。

たとえ、どんな名医がいたとしても、あるいは、どんな病気にもきく特效薬があったとしても、自分が病気だと思っていない人には、これらはまったく意味のないものです。病気を治す第一歩は、本人が自分の状態を自覚することです。私たちも、罪という、人を永遠の滅びに至らせる病を治すために、まず、自分が罪人であるという自覚を持たなければ

なりません。

では、自分が罪人であることを知るには、どうすればよいのでしょうか。そのことを、経験をおして、嫌というほど教えられる方もおられるかもしれませんが。

けれども、いちばん幸いなのは、聖書のことばによって自分の罪が示されることです。聖書には、「神の聖さ」と「人間の罪深さ」がよく記されています。そして、人がどれだけ神の愛に背を向けて生きているかが、いろいろな人物の記事をおして教えられます。それらのみことばが自分自身と重なるとき、それまではまったくピンと来なかったことが、急にわかるようになってきます。聖霊が、聖書のみことばをおして、その人の心のうちに働いてくださるからです。そのような機会が与えられるためにも、なるべく集会に出席し、自分でも聖書を読んでみるのが大切です。

そして、もし自分の罪が示されたのなら、自分が罪人であることを神の前に素直に告白することです。そうすれば神は、あなたが今まで犯してきた罪、また、これから犯すであろう罪のすべてを、キリストのゆえに赦してくださいます。

「もし、罪はないと言っなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」。

(ヨハネの手紙第一・一章八、九節)

22 従うことについて

だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。

(マタイの福音書一六章二四節)

聖書の福音ふくいんを十分に理解し、キリストを救い主として信じ受け入れることができたなら、その次は、キリストに従うことについて考えるべきです。「救われたら、それでおしまい。キリストには、もう用はない」というのでは、いのちを捨てて私たちを救ってくださった方に対して、あまりに失礼な話と言えるでしょう。

キリストも、ご自分を信じる者に、ご自分に従ってほしいと望んでおられます。キリストに従うことは、キリストの愛に応えることです。自分が受けた愛に対して、少しでも応えたいと思うのは、当然のことではないでしょうか。もし、「キリストを信じるのはよい

が、キリストに従うのはいやだ」と言う方がおられたら、そのような方は、キリストが私たちをどれほど愛しておられるのか、また、私たちのためにどれほど犠牲を払ってくださったのか、もう一度お考えになってみてください。

キリストが十字架にかかってくださったのは、私たちが地獄へ行くことのないようにするためにでしたが、それだけでなく、私たちが罪の生活を離れ、神とともに歩むようになるためでもありました。

そもそも私たち人間が造られたのは、神と交わり、神をほめたたえるためでした。しかし、人間に罪が入ってしまったために、それができなくなってしまうました。それを、キリストが十字架の贖いあがなによって、人間が本来あるべき状態に戻してくださいなのです。ですから、自分中心の生き方をやめて、キリストに従い、神のために生きるということは、人間の本来あるべき姿に立ち戻ることなのです。

キリストに従うのをためらうのは、「クリスチャンになると、できないことがいろいろと増えるのではないか」と心配するからかもしれないかもしれません。

たとえば、酒やタバコ、ギャンブルなどがそうです。けれども、これらは決して人に益

をもたらずものではありません。酒に関して言えば、

「酒に酔ってはいけません。そこには放蕩ほうとうがあるからです」。

(エペソ人への手紙五章一八節)

というみことばがあります。日本では、酔うために酒を飲むというのが普通ですから、証あかしのためにも、「いつさい飲まない」と宣言したほうが、酒から来るいろいろな失敗から確実に守られます。

また、タバコに関して言えば、

「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖靈せいれいの宮であり

……」(コリント人への手紙第一・六章一九節)

とありますので、聖靈の宮である自分のからだを蝕むしばむようなことをすべきではない、とわかります。ギャンブルについて言えば、

「どんな貪欲どんよくにも注意して、よく警戒しなさい」(ルカの福音書二二章一五節)

とあります。まっとうな仕事以外で、お金を得ようとすることは、貪欲から出た行為以外の何ものでもありません。

クリスチャンでない人でも、「これらのものに吞のまれないように気をつけないければなら

ない」と言っているのですから、むしろ、きっぱり縁を切ることができるとしたら、逆に幸いだと言わなければなりません。

また、「日曜日にやりたいことがあるから、毎週、集会に行くことはたいへんだ」と考えることがあるかもしれません。けれども、日曜日は、キリストがよみがえられた日です。キリストが十字架にかかり、私たちの贖い^{あがな}を成し遂げてくださったことを集会（教会）で記念する日です。日曜日に自分のやりたいことをやったとしても、それで本当に心が満たされるでしょうか。集会に行き、自分を救ってくださった方に思いを馳せ^は、神に賛美をささげるなら、私たちは霊的に十分満たされるのです。

あるいは、「クリスチャンになると、世の中で生活するうえで、いろいろ支障が出てくるのではないか」という不安もあるかと思えます。たとえば、「親戚づきあいや近所づきあいに面倒なことが起こりはしないか」、「職場や学校で変な目で見られはしないか」といったことです。特に、クリスチャンは、まことの神以外のものを拝むこと（偶像礼拝）はしませんから、冠婚葬祭などで周りの人と衝突したり、摩擦を生じたりするかもしれません。

昔の時代のように、クリスチャンであるというだけで迫害されるようなことは、今日の日本ではほとんどありませんが、クリスチャンとして敬虔けいけんに生きようとすると、ある程度の困難は避けられません。未信者に囲まれ、自分が孤立しているように感じることも、しばしばあることでしょう。

これらのことは、クリストに従ううえで背負わなければならない「自分の十字架」です。けれども、その「十字架」は、クリストが背負われた十字架に比べれば、比較にならないほど軽いものです。しかも聖書は、

「あなたの重荷を主にゆだねよ」(詩篇五五篇一二節)

と語っています。私たちの負うべき十字架さえ、主が背負ってくださいといたうのです。何という恵みでしょうか。

ですから、クリストに従って歩むということは、最初はたいへんなことのように思えますが、「主がすべてを守ってください」という信仰を持つて歩み出せば、その信仰のとおりになるのです。「案ずるより産むが易やすし」と言いますが、信仰の一步を踏み出す場合も、まさにそのとおりなのです。

主に従うことを躊躇ちゆうちゆうしておられる方の中には、「自分はまだ、クリスチャンとして歩むにはふさわしくない」と考えておられる方も多いようです。けれども、最初から完璧かんぺきなクリスチャンになろうとする必要はありません。信仰の一步を歩み出すということは、人たどえるなら、赤ん坊が「おぎやー」と生まれるようなものです。小さな赤ん坊が、一人前の大人と同じように行動できるでしょうか。決してできません。信仰生活も同様です。赤ん坊が時間をかけて徐々に成長していくように、クリスチャンも徐々に成長していけばよいのです。

ですから、「神が喜ばれないことはやめる」、「日曜日は主のために用いる」といった、クリスチャンとして歩むうえでの最低限の条件を満たすことができたら、将来のことはあまり心配せずに、まず第一步を踏み出すべきです。

救われるためには、「神は死者をよみがえらせることもできる」という信仰が必要ですが、信仰の歩みを始めるためには、「どのような状況においても、神は私を守り、霊的に成長させてくださる」という信仰が必要なのです。

聖書には、

「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ」(伝道者の書二二章一節)

というみことばもあります。ある人は、「キリストを信じてもいいが、若いうちは自分の好きなことをやって、年老いてから信じることにしよう」と考えるかもしれません。しかし、この考え方は非常に危険です。自分が老いを迎えることができるという保証など、どこにもないからです。今日、事故に遭って、その場ですぐ死んでしまうかもしれないのです。「死が間近に迫ってから考える」と言う人は、自分が突然死ぬこともあるということとをまったく想定していません。そのような人ほど、

「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる」

(ルカの福音書二二章二〇節)

と、神から宣告を受けることになってしまうかもしれません。また、年を取れば取るほど、世のしがらみが増え、捨てなければならぬものも増えていくので、従うことが余計困難になっていきます。そして、煮え切れないまま、生涯を終えてしまう可能性が高いのです。

反対に、若いときからキリストに従うなら、生涯キリストに仕えることができます。天において、その報いは非常に大きいことでしょう。しかも、その報いは永遠に続くのです。

何と幸いなことでしょうか。

「今は恵みの時、今は救いの日です」(コリント人への手紙第二・六章二節)とあるように、今こうして生かされているうちにキリストに従うことが、人生における最も幸いな選択なのです。

23 信仰生活について

キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。

(コリント人への手紙第二・五章一五節)

イエス・キリストを救い主として信じ受け入れたら、実際にクリスチャンとして歩み出す必要があります。その第一歩となるのが「バプテスマ」(洗礼)です。バプテスマは、キリストが弟子たちにお与えになった命令の一つです。「罪に生きていた古い自分に対して死に、キリストのよみがえりのいのちにあずかること」を、バプテスマという儀式——全身を水に浸し、水から上がる儀式——をとおして表現するのです(ローマ人への手紙六章参照)。

「人は、バプテスマを受けることによつて救われる」と誤解しておられる方もいるようです。しかし、バプテスマという儀式には、人を救う力はまったくありません。人が救われるのは、「罪を悔い改め、心の中でキリストを信じること」によつてのみです。キリストを信じてもないのにバプテスマを受けても、そのようなバプテスマには何の意味もありません。バプテスマは、きちんとした信仰告白に基づいてなされるべきものなのです。

では、特別な効力もないのに、なぜバプテスマを受ける必要があるのでしょうか。それは、クリスチャンとして歩む決意を、周囲の人々に対して、きちんと表明するためです。すなわち、信仰告白を具体的な行動で表すためです。神は、キリストを信じて救われた人が、それを明らかにすることを望んでおられます(マタイの福音書一〇章三二節参照)。キリストを信じたと言っているにもかかわらず、バプテスマを受けようとしなければ、そのような信仰は、かなり疑わしいと言えるでしょう(もちろん、特段の事情、たとえば健康上の理由などがある場合は別です)。ある人の信仰が本物かどうかは、その行いによつて判断されるのです。

バプテスマを受けたら、その次は、クリスチャンとして実際に歩いていくために、それ

その地域の地域にあるキリスト集会(教会)に属することになります。どの集会に属するかということについては、聖書に明確な規定はありませんが、通常は、求道中に集っていた集會に属することがほとんどです。また、バプテスマもその集會で受けることが多いのです。健康上の理由で外出できないなど、特別の理由のないかぎり、聖書は、個人で信仰を守ることを認めてはけません。「いずれかの集會の一員として信仰生活を送るように」と教えています(ヘブル人への手紙一〇章二五節参照)。

クリスチャンが集會に集わなければならない理由はいくつかあります。まず、個人で信仰生活を送ることがたいへんむずかしいからです。私たちの周りには、神を信じていない人たちがあふれています。そのような中で生活していると、周囲から影響を受けることが多く、信仰はどうしても弱くなっていきました。ところが、集會に出席すると、そこには同じ信仰を持ったクリスチャンたちがいます。クリスチャン同士は、同じ神を靈的な父に持つ兄弟姉妹です。そのような靈的な身内とも言えるクリスチャンたちと交わることによつて、互いに励まし合い、信仰を支え合っていくことができるのです。

また、クリスチャン一人ひとりには「からだの各器官」です(コリント人への手紙第一・一二

章二七節参照)。ですから、どんなクリスチャンにも、自分の属している集会で果たすべき役割というものがああります。その役割は人それぞれ違います。からだにはいろいろな器官があつて、それぞれの器官の働きが違うのと同様です。目立つ働きもあれば、人目にまったくつかない働きもあります。けれども、いかなる働きであつても、神の目には非常に尊いものです。ですから、器官としての役割を果たすためにも、いずれかの集会に属して、そこにきちんと集うことが大切なのです。

では、集会にきちんと出席していればそれで良いかというのと、決してそうではありません。集会に出席するだけでなく、個人的にも聖書をよく読み、よく祈る必要があります。聖書を読むことは神の御声を聞くことであり、祈ることは神に語りかけることです。これは、目に見えない神と交わる唯一の手段です。それをきちんと実践することができれば、信仰は間違ひなく守られます。

信仰生活とは、神と交わる生活です。人間は、神と交わることのできる唯一の存在です。キリストを信じることによって罪の問題を解決した人は、人間の本来の姿に戻ることができまます。自分中心の生き方をやめて、神中心の生き方をするようになります。自分中心の

生き方をしていると、不安やむなしさが必ず付きまといますが、神中心の生き方をすれば、決してそのようなことはありません。自分が本来いるべき場所、すなわち、神のみもとに
いるという確信を持つことができるからです。また、どのような苦しいとき、悲しいとき
にも、神がともにいて、自分を慰め励ましてくださるといふことも経験できます。そして、
死後のことを心配する必要もなくなるのです。

このようなすばらしいクリスチャン生活を、ひとりでも多くの方が送ることができるようになることを願ってやみません。この本をお読みになった方々お一人おひとりの上に、
主の豊かな恵みと導きがありますよう、お祈り申し上げます。

福音ア・ラ・カルト 23のショートメッセージ

2006年11月20日 初版発行 2000部

著者 竹尾 潤

発行者 J. B. カリー

発行所 伝道出版社

〒183-0056 東京都府中市寿町2-8-9

TEL 042-366-7760

FAX 042-366-7790

郵便振替 00140-9-27336

印刷所 (株)平河工業所

*落丁本・乱丁本は送料弊社負担にてお取り替えいたします。

ISBN 4-901415-21-2

ISBN4-901415-21-2

C0016 ¥500E



伝道出版社

定価525円

(本体500円+税)